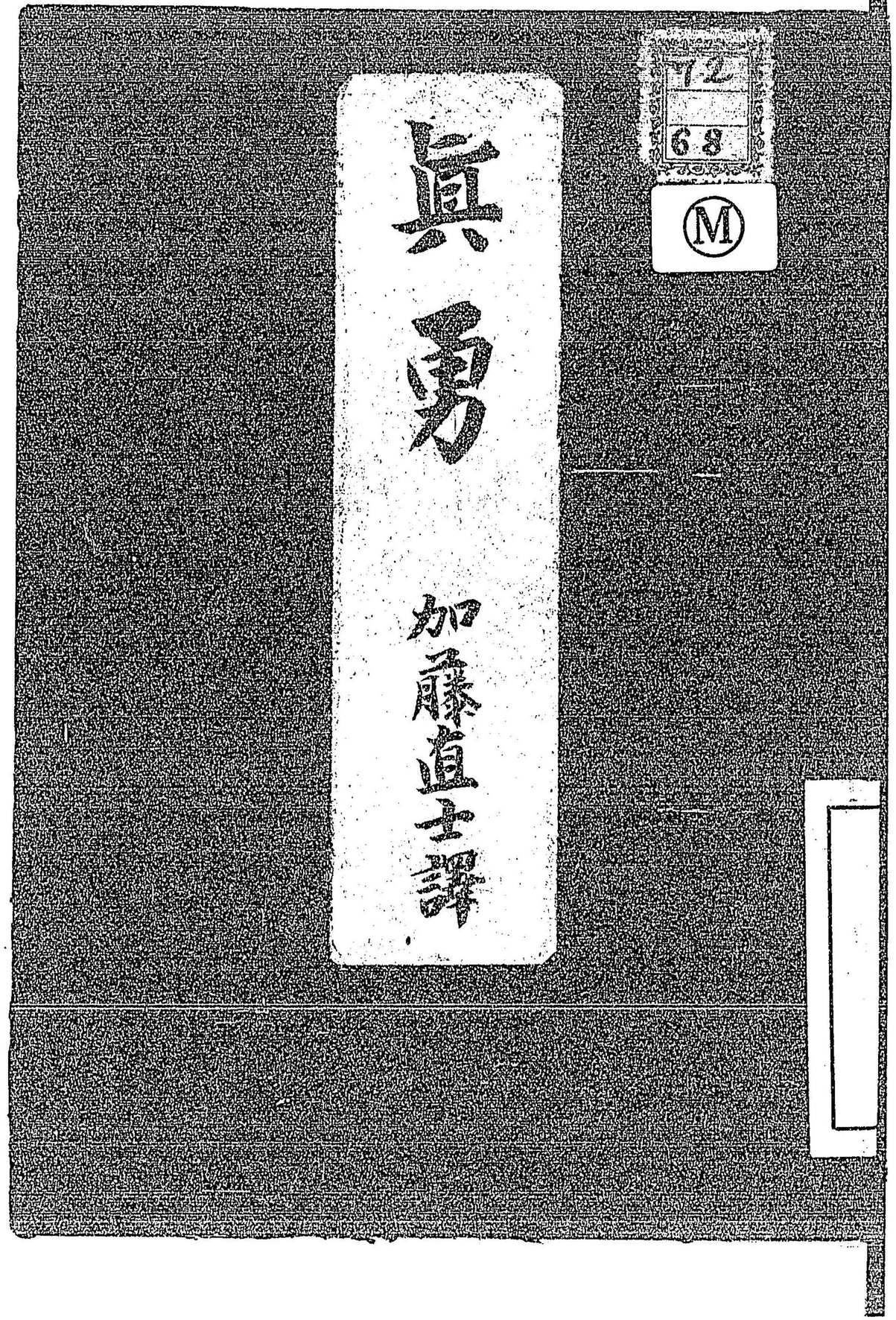

020839−000−5

72−68

真勇

トマス・ヒュース／著

M27

ABI−0668

72
68

72-68

東京帝國大學圖書之印

月一團

久保木健雄

廣い海をも隈なく照らし、千草の葉はも殘りおく宿る、あをやめのつりてもやさしく、まをちをの膽にのぞやきてもいさまし、

月高しいよ〳〵あかし壇の浦

謹んで此書を故山崎爲徳君
在天の靈に献ず

眞勇序

加藤直士君基督の眞勇を譯す、蓋し當世に慨するものあるが如し。

今や女性的の基督教唱道せられて、男性的の基督教跡を隱くし、イザヤの雷聲遠く去て、擾々たる泣蚊の聲四面に囂すし、憾慨の情に堪へず。

此書を披て基督の眞勇を想見せよ、巍然として天に聳へ、仰ぎ見る吾人をして、意氣豪たらしむ。

僞善者を叱咤し、妖魔を驅逐し、山嶽を抑へて、谿

谷を揚げ、狂風怒濤の中に巖立して、世に眞勇の如何を知らしむ。嗟呼啻に依賴主義の信仰を學ぶ勿れ、神に由て屹立するの精神を學べよ、徒に十字架を仰で永罰を免かれたるのみを祝する勿れ、寧ろ之を仰て大丈夫が心膽の定まるところを知れ。此書の眞意蓋しそれ茲に在る可し。

明治廿七年四月　　容膝堂主人　松村介石識

欠

MISSING

緒言

一、本書は英國トマス、ヒューズ氏原著「マンリ子ス、オヴ、クライスト」を譯述したるものあり。氏は有名なる「トムブラウン、ス、スクール、デイ、アト、ラグビー」の著者にして、現時英國の社會、殊に其の青年間に景仰羨慕せらるゝ一大偉人あり。余や不文、殊に商務の餘暇を偷んで、此の偉人の名著を譯し、敢て類猫の譏を甘受する所以のもの、蓋し我邦青年の前途、杞憂に堪へざるものあつて存すれべあり。

一、余が藏する所の原書、巻中、山崎爲德藏書の印あり。蓋し是れ君が愛讀の書たりしなり。余曾て山崎君作る所の「信仰之歌」を誦し、且つ其の生前、夙に我邦のカーライルを以て自ら任せるを聽き、其の抱負を愛し、其の人物を慕ふや久し。今此譯書印刷成る。君が夭折を惜しむの念、轉た禁ずる能はず。之を君が在天の靈に獻ずるに、余が衷情實に已む事を得ざればなり。

明治二十七年大婚二十五年祝典の當日、横濱街頭紅塵萬丈の裡に於て。

譯者識

眞勇目次

第一章　紀元前三十年の猶太國＝大勇將の戰場。　一丁
第二章　丈夫膽＝眞勇の特性。　十一丁
第三章　基督の幼時。　二十八丁
第四章　基督の天職。　五十五丁
第五章　基督の事業。　七十二丁
第一期（創業の時代）
第六章　基督の事業。　九十三丁
第二期（凱旋の時代）
第七章　基督の事業。　百十一丁
第三期（孤城落日）
第八章　基督の臨終。　百二十九丁
第九章　結論。理想主義。　百四十二丁

眞勇

加藤直士

第一章。紀元前三十年の猶太國。＝大勇將の戰場。

若し夫れ爰に、吾人が眼前に横はる一大問題に接して、苟も適切に此れが解釋を下し明了確實に、其中心点たり主人公たる、一大人物耶蘇基督を了得せんと欲せば、須らく先づ、彼れが主動者として教師として現出せる其當時パレスチンの國柄如何、其周圍の境遇は果して如何ありしかを、研究し、最も緊要なりと信ず。蓋し是れ多くの宗教的研究が、吾人を驅つて、模糊の中に彷徨せしむるの通弊を脱するの最良法たれば、彼れが其の特殊の生涯を初め、其傳道の生涯を終へ、而して其傳道の主旨問題を、明瞭ならしめて、其の使命を盡したるの地、即ち南部一地方ユダヤの狀況を言はんに、彼が齡未だ十歳に至らざりし頃、羅馬人は來つて當時の國王ヘロデ、アーチエロスを廢し、之に代ゆるに羅馬の方伯を置き、以て之を

其封土に編入せり。其後遠からずして、ガマラのユダと云ふものあり。羅馬の壓制を憤り、人民を煽動して、叛旗を翻がへし、猛然之に抗せしも、羅馬の鐵拳い直ちに之を討伐し盡せり。此時より以來キリストが宣教の首途に就くに到るまで、エルサレムと其周圍の郡縣い、常に謀叛の淵に臨み、其勢累卵宙あらず。辛ふじて所々に屯在せる羅馬營卒の兵力を以て、之を鎮壓するを得たるのみ。羅馬方伯の憂慮、常に此の一点に在りしあり。

猶太民族の性質上、最も長所にして又最も短所ある特性は、恰かも相謀つて羅馬の壓制をして、殆んど耐ふ可らざるの慘苦を、此の國民に與へたるが如し。モーセの律法を遵守せる此種族に取りては、恰もアラビヤ、エルサレム、メッカが其民族に於けるが如き關係を有せる、エルサレムの一種奇特ある地理上の位置い、凡てい羅馬郡縣中、此のシリヤの地方をして、最も危險ある一領土たらしめたり。人類中尤も頑骨血性ある巡禮者の巨群は、年に三回以上必らずや此の都府エルサレムに群集せり。而して其の都度必ずや夥大い捧物と貢歛とを携へ來り、之を神い宮殿と之れが宰司とに献納せり。是に於てか、莫大い富い此等宰司い掌中に歸し、其い富力い已に以て世界い主たる羅馬國人をして、恒に畏せしむるに足れり。

然りと雖是れ未だ羅馬の主權者をして、常に憂慮措く能いざらしめたる最大原因にていあらざりき。現に彼い此の恐るべき民族の此の畏るべき首動者と相對峙し、數十年間能く其の威嚴を保持せしにあらずや。然り猶太人民い首動者たる宰司い長等い、己が富力に加ふるに實に一種の偉力を有せり。羅馬が征服せる國々の中、宗教上社會上の有力ある主動者固より尠からしとせず。然れども羅馬人い強且つ剛ある、常に輕蔑的の寛容を以て、彼等を冷遇し來りぬ。然るに此猶太人い宰司等に向つていい、羅馬人い寸時も其心を許し得ざ。常に警戒い眼を放たざりし所以いも果して何ぞや、是れ他あし、不思議にも此等の人々い、國家と主府エルサレムの神聖ある榮光に關して、自ら活ける口碑とあれるものにして、羅馬人い鐵腸と、苛

酷、と、を、以、て、す、ら、猶、ほ、能、く、歴、服、す、る、こ、と、を、得、ざ、り、し、此、れ、頑、執、限、り、な、き、國、民、れ、上、に、常、に、一、種、の、無、上、權、力、を、弄、せ、る、を、以、あ、り。

實に然り當時宰司の長、學者パリサイ人等が、自國人民の頸間に置ける壓制れ苦軛ハ、其實遙かに羅馬人れ兵力よりも酷しきもれありき。彼等は所謂モーセの律法を圍繞するに、口碑と儀式れ巨大ある外壁を以てし。命じて曰く、此れ律法其物よりも、一層神聖にして、且つ服從れ義務あるもれありと。又自ら任じて曰く、此れ傳說儀文れ維持系續を計るハ、實に吾等が專務なり、即ち是れ至大ある國家的れ遺業にして、神が吾等の祖先に下し玉へる、祭事中の最大要務ありと。

彼等が自信せる所によれば、彼等こそハ實に是れ神の特撰を受けたる、神聖にして學識ある階級にてありき。此の階級れ外ハ、所謂律法を知らざる民、暗黑れ群衆として蔑如せられ。唯々諾々苟くも一言れ不服を唱ふるものあらば、直ちに神に背ける罪人として、咀ハるゝに至れり。

嗚呼、當時の境遇、已に此の如し、是時に當りて、一小僻村の寒木匠、身ハ例令王族の末裔たりとも、全然當時の主宰社會の外に立ち、教導者としてハ、一寸の位地をも有せざるの身を以て、孤身單獨、六尺の軀を提げて、改革的の職命を全ふせんと欲す。夫れ世に逆境に處するの人少からず。雖然全世界の歴史中、誰れか能くかゝる暗澹たる逆潮に棹せるものやある。是れ實に逆境中の最大なるもの、而して「ナザレ」寒村の一青年實に此の時に起てり。

眼光を一轉して北部即ち「ガリラヤ」の狀況を察するに、其の境遇や大同小異、而かも比較上一点れ良点あるを見ず。當時の王「ヘロデ、アンチパス」ハ其血統中、最も怯弱の名を得たるものありしも、無法にも其の兄弟の妻を奪ひ、巧に媚を羅馬の帝王「シイザル」に呈し、其の支配せる人民の膏血を絞りて、之を自己の奢侈驕暴に費やし、而して豪然帝王の冕冠を戴けり。然れ共是れ只だ外面のみ、政治の實權ハ悉く皆な市邑城郭に屯戍せる、羅馬軍人の手中に歸せり。

又一方にハガリラヤ全州の人心に、一種の最上權を有せる一團体ありて、隱然彼と相拮抗せり。是れ即ち例れ宰司等にして、其狀毫も南部と異なることなきも、只其社會の權勢と人民とに對する敵視軋轢れ度、之を南方に比して頗る薄弱ありしれ差あるれみ。主が北方傳道れ中心点とも稱すべき、ガリラヤ湖水の西岸地方にハ、人口稠密にして、生計殷富なる無數れ都邑、恰かも蜘蛛の網の如くに羅列し、異邦の商人多く其中に雜居せり。是を以て血統漸次に異邦の分子を交へ、純粹なる猶太人民の血統を保持することを能ハず。加ふるに彼れエルサレムの如き、宗教上れ中心点を有せざるの事實ハ、自然に以て南方猶太人れ輕蔑と冷遇とを招き、其の結果や、終に此地の宰司學者輩が、其れ民心を支配するの權威を殺滅するに至れり。雖然彼等が尙ほ一般人民の上に有せる、傳說的の權勢や、未だ大に侮るべからざるもれあり。只だ其れ權威に服從せざるものを罰すること、彼の南部に於けるが如く、嚴且つ速かならざるの一差あるれみ。以上は基督が在世れ當時、其れ生存せる社會れ概略ありき。

現今の世界に於て、當時れ猶太國と相類似するれ地ありや否やを問ふもれあらば、余ハ答へて曰ハんとす、今日我帝國(英國)れ版圖に屬する印度れ地こそ、或点に於てハ之れが屈强の引証たることを得べしと。實に現今印度の一部分の狀況や、紀元前三十年頃のパレスチンの狀況と、頗る相類似するものあるを見る。試に看よ彼の印度マーラッタの地方に於て、土着の王統ハ已に其の跡を絕ち、異邦の權勢政治の實權を握ること、恰かもエドミヤのヘロデ王室が、猶太に君臨するが如く、英國人なる政府の執權者が、國民一般の嫌惡と畏憚とを受けながら、其實權を振ふに於てや、猶ほ當時れ羅馬方伯と毫も異なる所なし。又一方に於て國民が其の僧侶の壓制を禁ずること、猶ほ當時のガリラヤユダヤの狀況と髣髴す。今夫れ試にマーラッタ人をして劇烈なるマホメットの敎徒たらしめ、メッカをして彼れシンダヤホルカれ地方に在らしめたりと假定せよ。而して千二百有餘年

れ間、英國人民の心裡に銘刻せられたる、基督教的の品性にして、一朝全く英人の性質中より拭ひ去られたりとあし、然り而してヤーラッタ人に代ゆるに、ユダヤ人れ頑骨血性を以てしたりと假想せよ、かゝる境遇の中に於て、一寒村の改革者起つて道を其間に宣べ、ブラマ僧侶れ激怒を喚起し王室の存亡を恐嚇し、英人ある住民の混亂を釀成せりと假定せよ。然らば則ち其れ境遇と狀況とは、正に是れキリストが其れ傳道を初めたる當時、其の身圍に蜂起せしめたる、千難萬苦れ幾分かを推測するに於て、中らずと雖ども蓋し又遠からざるを見るべき歟。逆境已に此の如く、四面暗澹、一條の活路あきに、爰に只だ一の稍や光明に近き一事の存せるを見る。他あし、當時れ國民の心情ハ、實に楽らんとする救世主を待ち設くるれ念を以て、充溢せり。此王や即ち斯の民をして、あらゆる苦艱れ中より脱せしめ、所謂ダビデれ王位に即きて、世界萬國を統一すべきもれなりき。此れ希望の激烈に趣くの極や、基督が傳道を初むるに先だち「天國は近けり悔改めよ」

と野に呼べる一敢師の叫び聲は、端おくも無數の群集をして、ユダヤガリラヤれ全部より來りて、ヨルダン對岸れ原野に蝟集せしむるに至りぬ。既のバプテスマのヨハネを聞かんとて來りたる群衆れ中には、當時の有名なる學者僧侶の輩もありしあるべく、又羅馬人ヘロデれ輩よりも遙かに重き罪悪れ軛ハ、自己の上に懸り在ることを確信せる、敬虔ある幾多れユダヤガリラヤれ農民等もありしことは更に疑を容れざるあり。然れども悲哉、此れより三年間の記錄ハ、明らかに吾人に示せり、此等有爲の人民すら、猶ほ且つ其れ天國を以て、此世れ王國ありと誤認し、聖きエルサレムの市城を以て、全世界に君臨する大帝王の王都とあすの一事ハ、常に以て其腦裏を脱ずること能ハざりしの一事を。嗚キリスト一條の活路ハ偶まを以て彼れが死地たりし也、悲哉。かくて基督は最初より終りに至るまで、曾にパレスチンに成立せる、凡ての諸權勢と攻戰するの要ありしのみあらず、不幸にも當時國民中の最良なる人民の、最高ある希望とさへ衝突せざる

を得ざりき。實にも救世主を望むの聖意い、偶ま以て其の生涯の行路に於て最大なる障碍となりしなり。如何となれば國民の内、最も明晰に救主の來臨を確信せるの徒は、此の木匠の子なるナザレのイエスを以て、約束の救世主なりとは、如何にしても信ずること能はざりしを以てなり。見よや主が其の生涯を終るに先つこと僅に一二日、慨然として一夕其の最親最愛なる弟子等に向ひ「汝曹い今猶は自己が心の如何なるやを知らざるなり」と告げ玉いざるを得ざりしにあらずや。

吾人若し正確に僅かに三年の短日月間に於て、ガリラヤの一農民が成就せる事業と、其れ之を成就せる人物の品性とを、理會了得せんと欲せば、須らく先づ當時此のガリラヤの一農夫が外界の狀況と、此れが周圍の境遇とを、常に念頭に記することを務めずんばあらざるなり。

第二章。丈夫膽＝眞勇の特性。

余輩が講究の初めに當り、尙は此に預め注意すべき一事あり。是れ他なし無益なる心理上の議論に入ることなく、只吾人各自れ通性によりて、丈夫膽、眞勇、及び勇氣れ三語に對し、適切なる定義を附すること是れなり。世にい此等の言語を以て、悉く同一意れ言語と思定するものあり。然れども敢て問ふ是れ果して然るか。余は普通なる字義上よりしても、斷じて其の然らざるを見るなり。丈夫膽と眞勇とい蓋し同意義なり。而して此の二語い通常世に用ひらるゝ勇氣なる語の含有せざる多くれ意義を有せり。假令ば溫柔謙遜れ如く、同情愛恤れ如き、是れ丈夫膽れ欠くべからざる性格たりと雖も、勇氣れ必ずしも含蓄すべき所にあらざるが如し。勿論此二語い勇氣なる一語れ中に、含有せらるゝ凡ての性質を包含することい、恰も根底れ樹木に於けるが如し。樹木之れによりて初めて立つ。只だうれ根あり、故に其位置や最も低く、其品質や最も粗なるを免れざるなり。且つ夫れ勇

氣い人性の特有物にもあらざるあり。例令ば鬪犬(アルドッグ)の如く海狸れ如き、人間れ未だ曾て達せざりし程の点にまで、此の勇氣の一性を享有せるにあらずや。

然らば則ち勇氣とい何等れ性質より成るか。曰く、第一に剛情を含む。即ち一旦自ら成すべしと決したる所い、一身の安危顧みる所にあらず、苦痛も死も恐るゝ所にあらず、萬難を排して其意を貫徹せんとするの精神是れなり。此精神団より嘉(よみ)すべし、是れ實に有益にして尊貴ある性格なれば也。然れども如何せん、是れ寧ろ獸類の特性にして、必ずしも人たるの資格あるに限らざるを。試に思へ此種の勇氣世に何程の功をか奏せん。是の勇氣果して滿天下の暴虐狂戾、敗德殘忍を鎮壓し、之を服從するに足るの力あるか。

世には身軀れ强健を以て勇氣の要性と誤認するもれあり。競走の如き角力の如き擊劍れ如き打毬の如き、稍もすれば此等の技術れ達人を呼んで、此を勇者なりと稱揚するに至る。甚たしき誤りと云ふべし。試に看よ、萬古の勇者、英のチルソンは、十四歳れ時赤手を以て北地れ大熊を毆殺し、船長其れ冒險を咎むるに當り「君よ、余は未だ(ミスター)プ井ャ(恐怖君)を識らざるなり」と答へたるの勇士たりしゐ係はらず。其れ体格れ瘦弱なりしが故に「ボート」競漕(レイス)の時れ如き、未だ曾て一度も勝利を得し事なく、常ゐ同僚れ嘲笑を受け、彼を其れ組に入るゝ事を嫌ひしと云ふにあらずや。古來人鍾れ中に宿れる最大れ勇氣と雖も、若し此れが所有者にして未だ其れ術に熟煉せざる時は、其れ道れ達人と敵抗して、恐らくは五分間れ少時も、勝利を維持せしむる事能はざるべし。

体育団より善事なり、唯だ夫れ今や適當の程度を越へて之を過稱するに至りしを慨するなり。如何となれば一國皆ゐ剛健の壯丁を以て充つるに至るも、若し夫れ余ゐ所謂眞勇を欠くに於ては、是れ空しく岩石猛獸の集合たるを免れざれば也なり。斯く云へば余い決して体育其物を非議せ

んと欲するにあらざるあり、其の社會に與ふるの益、固より尠なからざるを知る。只だ其れ此の一事を記憶せん事を要するなり。曰く、眞正の丈夫膽は、体軀の强弱を撰ばず、只だ其の修養の多少あよりて、人心に發現する品性なりと、他事をして、皆あ均しからしめ、而して鍛煉發達せる身体と、纖弱枯瘦の躰軀とに於て、何れか多く勇氣あるべきやと問はゞ、余は躊躇しつゝも前者を以て勇氣多からんと答へんと欲す、唯夫れ余をして再び言わしめよ、世に强軀者時として獸たるべく、時して儒夫たるべし、眞正の勇者豈に獸ならんや儒夫ならんや。

以上余は必ずしも眞勇の資格として、見るべからざる所の諸性を講究し來れり。今や一歩を進めて、然らば則ち眞勇の欠くべからざる要性い、果して何ぞやとれ問に答へんと欲するなり。余い先づ爰に有名なる二三れ勇者の事蹟を擧げて、之が研究を試みんと欲す。如何となれゞ吾人若し此等の事蹟れ中に於て、凡てれ場合を貫きて共有する所れ、通性を發見するを得ゞ、吾人は(即ち勇氣を含有する所の)丈夫膽の、欠くべからざる要性と特質とを了識する事尤も容易なればなり。

余い此國に於て數年前尤も愛讀せられ、今猶は尊重せらるゝ所のもの、而かも此等の事蹟を以て充されたる一書、即ち「チピヤの「牢嶋軍記」より二三の事實を摘採せんと欲するなり。「チピヤ」は其の奢龍奔雷の鉄筆を揮つて、バダヂョッの落城の終り、當時の軍士を記述したる后斯く言へり。

誰れか能く彼のサンタ、マルヤに於て、先陣劈頭に斃れたる彼のボルトガルの上等兵が現はせる、澱々たる敢勇を記述するものやある。或は又彼の獨り必勝を決斷して、一身を白刃の壁中に投じ、潔よくも敵兵の銃尖をして、思ふ儘に其の頭を貫かしめつゝ斃れたる、彼の炮兵の剛胆を描く事を得んと。

又コアの戰狀を記して曰く

愛蘭の產にてスチユワートあるものあり、年未だ十九歳の若年あると、

其の躰軀の魁偉にして、筋力の強大なるとゐよりて、常ゐ「此の童子」ある綽名を受け居りしが、何の彼岸ゐわりて勇ましく舊闘し、大ゐ其の才能を現はしゝも、我軍利あらざるに及んで、衆と共に橋側ゐ退きしが、彼は最后に止まれり、而して橋を渡らざるなり。振り返つて決眦、佛軍を瞋みつゝ、大聲疾呼して曰く「嗚呼、是れ吾等が廣言の終りなるか、吾等は此の初陣に於て敗を取れり、畫子スチュワートは生きて此の言を聽く事を欲せざるなり」とかくて猛然獨進、怪力を舊つて最も近き敵兵を擊斃し、敵の発れしめんが爲めゐ開ける活路を肯んせず、猶ほも博闘血戰して終に敵中に斃れたり。

尚ほ感ずべく貴むべく英雄らしきは、軍曹ロバルトマッケイドの死なりけり。マクリオド軍進擊の時に當り、同じく愛蘭土北部の產たる此の軍曹は、二人の敵兵が炮口を揃へつゝ、最初に堤坊の上に起ち上がるべき我兵を狙擊せんと、身搆へつゝある事を見たり。現時中將の榮職に在るブラオン將軍い、當時未だ十六歳の初年なりしが、之を見るや自ら氏の死地に飛び入らんとおせり。マッケイド時に自ら廿四歳、堤上ゐ躍り上らんとするブラオンを引き落し、沈靜ゐして決意深き語調を以て曰く「君よ君は未だ死するに若かぬ。過ぐるなり」と、忽ち身を躍らして堤上ゐ起ち、敵丸の的となり兩丸を其身に受けて斃る。

而して英兵の總体を論評し、其の序文に於てかく云へり、

彼等の行爲は當さに其の系續者の行爲たるべし。試ゐ軍艦バルクンヘッド號の破船を見よ。英屬なる船長ライトキラドット一令の下に、四百人の水兵は泰然として一言の不服なく、恐るべきの死を迎へつゝ、婦人と小兒とを短艇ゐ救ひたるを喜びとするの時を。嗚呼天下何ぞの處か此の犧牲的行爲に比すべきの歷史ゐらんや。

以上往時れ事蹟に加へて、吾人が數月前に聞知し得たる、近來れ例証を記すべし、即ち彼の憐むべきポンチプリッドれ坑夫等が、坑中に壓塞せられ

たる同輩を救はんが爲めに、身命を兩手に提げて、日夜危險なる坑中に働きし事。及びセントルイスの一博徒が、賭博臺より直ちゐ火災の場に走り付け、婦人と小供等を救ひ出さんが爲めに、三度び火焔の中に出入して、終に負傷の爲めに慘死せる事とを。

以上列擧せる引例を一貫して共通する所のものは、吾人が先きに歸犬海狸等と共有するものなりと論定せる、獸類的勇氣の特性たる、安逸を顧みず苦痛と死とを恐れずして、一意自らの決心を貫徹せんとするの決意、即ち剛情是れなりとす。

此の一点や凡ての場合を貫きて同一なり。敢て問ふ猶ほ他の通性ありやを。吾人若し白刃の柵中に頭腦を碎きたる炮兵や、或ハ畫子スチュワートの場合をのみ考ふる時ハ、他に見るべきの点あるなし。此等ハ自己の意志の固執より來る自重心の發現にして、彼等硬骨の剛者をして、苦痛も危險も果た一死すら、避けざらしむる。所以の一念、自己の心中に存する事を、証明するの行爲たるに過ぎざるなり。是れ甚だ貴むべく嘉すべきの事たるや固より疑を容れず。

然れ共吾人ハ直ちに軍曹マッケード及びポンチブリッドの坑夫の行爲にありて、前者に比せバ今一層高貴にして、愛稱すべき一物あつて存するを感せずんばあらず。而して是れ啻に動物的勇氣の多少大小の差異にあらず。炮兵と畫子とが一死を視る事鴻毛の輕きが如きの一点や、天下實に比多からず。然るに軍曹マッケードの行爲に於て、之を畫子スチュワートに比せバ、別ゐ大に吾人の忠情を感激せしむる所以のものあつて存するハ他なし。其の行爲の動機にして同じからざるのみなり。少なくとも後者の價値ハ、主として自負自重の偉大なるに存し、前者の價値ハ敵身犧牲の尊嚴なるに存せずんばあらざるなり。

バルクンヘッドの場合に於けるも亦同じ。船長ライトハ脚底の海が恐るべき沙魚を以て充されたるを知らざるにあらず。而して又船ハ短艇の戻

り來るまで、水面に浮び離きを知らざるにあらず。而して號令一番、甲板上に下り來つて隊伍をなすべきを命せり。滿船の兵士亦能く此危險を知れり。然れども此の命を聽くや、肅然整立、一言を發せず、以て轟然として大艦の足下に覆沒するまでに至れり。チビヤヽ其の兵道の好愛と、武勇の感佩とに充てる心情を吐露して、之を奔雷の健筆に走らし、以て此れが賞讃を下して曰く「嗚呼天下何れの處か此の犧牲的行爲に比すべきの歷史あらんや」と蓋しチビヤヽ最も適切なる評語を下せり、然り此の評語にして果して適切なりとせば、吾輩ハ即ち吾人の問題の一方面を解釋し終ハれりと云ふべし。是れ他なし、勇氣の最高なる種類ハ行爲の中にあらずして、寧ろ無爲の中に存するの一事是れなり。凡そ肉体の奮發ハ、反つて大に苦痛を減少するものなり。是を以て震天動地の戰場に臨むか、或は又激烈なる危機に遭遇するや、其の刺擊と激昂とおよりて、一死を輕ずるの勇氣を得る事、敢て難事にあらざるなり。只夫れ手を拱き、泰然として死地に就くに至りてハ、更に一段の大勇を要するものなり。換言すれば危險の面前に於ける自制的精神ハ、必竟自任の最高程度にして、單純なる勇氣と丈夫の眞勇とを區別する一大特性たらずんばあらず。

然りと雖も以上吾人が講究し來れる所ハ、未だ此の一大問題の一小部分たるに過ぎざるなり。即ち戰場、破船、毒坑、火災の如き、恐怖危急の時に於て、始めて試煉せらるゝ勇氣たるに過ぎざるなり。是等危急の時ハ、一般人民の上に來るべきものにあらず。又其の生涯中屢々起るべきものにもあらざるなり。然るに顧みて吾人の生涯を一考すれば、假令彼れ戰場や破船の如く、恐るべき狀況にあらざるも、猶ほ戰場破船と異なるなきの嚴格を以て、吾人の勇氣を試煉すべき、千種萬態の境遇は、日夜常に吾人の周圍に群衆するにはあらざるか。如何となれば吾人ハ皆な戰爭の境遇中に生れたるもの、即ち吾人が身圍を繞環せる、千種万態の罪惡、詭譎、不幸、疾病、等の諸敵と抗戰し、吾人が衷心の連呼する處に從ひ、此永久無限の戰場に於て、

「人」として血戰奮鬪せざるべからざるものなれば、なり。

然り而して此の生涯の戰場に在りて、一騎當千の激戰をなすに方り、眞正なる義戰の要素にして、又眞勇丈夫膽の最后の証憑たるべきものゝ果して何ぞや。曰く眞理を愛するの義烈膽是れなり。嗚呼此の義烈膽、人性の中尤も稀有にして、又尤も高貴なるゝ實に此の一心あるかな。如何となれば眞理を愛する此の義烈の精神や、其の完全に進む事益多ければ、其の吾人に求むる事又益多く、而して眞正丈夫の理想的標準をして、又益高遠ならしむるものなれば なり。

是に至つて吾人ゝ初めて基督の生涯に就き、大に學ぶべきの一事を發見するに至れり。吾人の之を講究するゝ益熱心にして、又益々忠實たらば、吾人の經性を益する事、又益重大あるを知るべし。基督曰く「我之れが爲めに世に降れり、我が來るゝ眞理につきて証明をあさんが爲めあり」と、証明をあす、之を公然明白ある敵人に行ふゝ易し。若し夫れ之を吾人が愛慕する所の者尊敬する所の人に向ひ、吾人の衷情の深底に於て、必ず眞理ありと確信せる所の事を、維持主張せんと欲するに至りてゝ、是れ蓋し勇氣と、丈夫膽とに對する、最后最終の試驗たるにあらざるを得んや。試に思へ、吾人ゝ吾人が愛慕尊敬する所の人々の中に、通常用ゐられ來りたる標準によりて、事物を判斷し識別せんと欲するの習慣と傾向とが、如何に大且つ強あるやを。然れども此の標準其物と雖も、虛心平氣自己の觀念と習慣とを脫却して、直接に眞面目に、吾人が面前に横ゐる或る問題に接するに方りてゝ、脆くも吾人が迷信と共に、破滅し去らるゝの時あきを保せざるあり。かゝる時に方りてゝ、吾人ゝ已ひ事を得ず、涙を揮つて心裡に銘刻すべき一事あるを見る。他あし、啻に吾のみあらず、吾人が愛慕尊敬する所の人々すら、是まで眞理あらざる、從つて丈夫らしからざる標準によりて、略言すれば假想的に事物の判定識別を爲し在りしを悟得する事是れあり。嗚呼此時あり是時あり、吾人の勇氣と丈夫膽とが、最も烈しく試煉せらるゝや

實に是時あり。是れ實に吾人が其の尤も敬愛し尊崇する人々の、失望と反對とに敵抗し、自己の毀譽褒貶を顧みゞ、吾人が衷情良心に是れ眞理ありと確信せる一物の爲めに、飽まで之を主張唱道し、之と共に立ち、之と共に斃れんとするの、一大決意を起すべきの時たるあり。

安逸去つて敵愾來り、稱賛と同情とは變じて誹謗と仇恨とある。此の激變、是れ乎此れ吾人が老若男女の區別なく、生涯の凡ての境遇にありて、日常吾人の心情と意志とを、試煉琢磨する所のものあり。エマルソン曰く「英雄とは名譽と身命とを雙手に提げつゝ、諤々たる言論と、亭々たる行爲によりて、泰然悠然、眞理の爲めに、怒濤と紛亂とを迎へ得るの人即ち是れなり」と平和と繁榮とを樂しむの我國現時の社會に在りても、若し夫れ眞に諤々たる言論と、亭々たる行爲を保持せんと欲せば、百難忽ちにして身圍に蜂起し來り、劇烈なる試煉は鐵鎚を受くる事、火を睹るよりも明かなり。已に眞理を愛するは義烈膽あり。從つて起り來る所のものは即ち義務は

觀念是れなり。是れ實に勇氣と丈夫膽とを識別する試金石にして、吾人は早晩考究すべき問題あり、チルソンの記念碑が、敦動市中の最良位地に屹立し、世界万人の稱歎を受くる所以のもの、單に彼れが敢爲の剛勇によるにあらざるあり。前世紀のピタバロー公、今世紀のダントナルド公の如き、其の不撓にして而かも成功ある敢勇に於ては、余輩チルソンに一歩を讓るべきものあるを見ず。然るに凡て此等の伴侶に卓越して、嶄然史上に其の頭角を現はす所以のもの、他なし。義務に忠實ありとの一觀念は、常にチルソンの名と共に連環して、吾人の腦裡に映現し來ればなり。

羅馬帝國の末路、恐るべき革命の戰亂中、史上最も殘忍酷薄なる軍隊が、シイザル宮殿の周圍に暴行跳梁するの時、一時間内の勝敗は當時の驍將ガルバとオーサウの兩將間、天下分け目の大合戰を一決し去らんとする危機一髪の時に際し、近衛の一卒ジユリヤスアチカスなるもの、鮮血淋漓たる白刃を提けつゝガルバの面前に亂進し、驕然として自ら敵將オーサウ

を、艶し、來れるを、告ぐ「我友よ。誰の命によりてか」と、れ是時、老將ガルバが、一言の會釋おりき。大歴史家タシタスの強硬なる鐵筆に、十八世紀間の年月を經て、此の美談を今日に傳へ、以て万世の龜鑑とれおしぬ。

友よ誰れか汝に命せしや、誰れの命を行ひつゝあるか、是れ實に凡ての戰士ゐ向つて發すべきの問題にして、其の如何なる種類の戰場にありても兵士、政事家、宗教家、商業家、其他凡ての剛勇男兒と、堅忍の婦人とに於ける勇氣の眞否を判決する、試驗問題たらずんばあらざるあり。

世の中に三つの根にて立ちにける。

智慧と意志、是れ万職にかゐめなる。

されどゐは、おもゐるものは服從と、

天地呼びぬ。實にや是れ、義務の巖にはびこりて、

雨にも風にも動かざる千歳の松の親根かゐ。

余れ信ず吾人若し此の問題を考究する事益深ければ、其の結論の到底此の一点に歸着せざるべからざるを知る事、又益確固たるべきあり。意志の強堅即ち剛情れ、凡ての勇氣の根蔕たりと雖も、勇氣一進、眞正の丈夫膽と、なるに先ち、先づ欠くべからざるれ、自己の意志を放棄する事是れあり。然り而して其の之を放棄する事益全たければ、吾人の勇氣の性質や益完全に、吾人の丈夫膽の勢力や又益強大あるべきなり。自己の意志を放棄する、と、れ、何ぞや、曰く、他ゐし、義務に忠實ゐる事是れのみ。

神の健兒、永久の愛よ。

我が意志れ捧ぐる爲めの器ゐり。

とれ是れ「インスピレイション」の極点に於て、詩宗テニソンの心胸より、溢れ出てたる聖句にあらずや。然り而して過去も現在も將來も、常に此の叫聲を受け玉ふ、所謂神の健兒基督れ、以下の一語の中に畏くも、其の勢力の秘訣をば吾人に遺し玉へり曰く、

我れ我と汝曹の父の聖旨を成し遂げんが爲めに世に來れり

第三章。基督の幼時。

エマルソン

樂と塵はいと近し。
神と人とは一歩のみ。
汝、爲せよと、義務さふやけば、
我は、成し得と、青年答ふ。

主イエス、キリストの生涯と品性とを研究せんとするに當り、其の如何なる側面より、又如何なる目的を以てするに關せず、劈頭第一に遭遇すべき一大困難あり。是れ他なし、主が三十歳の齡に達し、バプテスマを受くるの時に至るまでの間、吾人が信憑すべき記事は、實に五六の短文句中に含有せられたる是れなり、吾人が知る所のものは、只だ彼が十二歳の時、エルサレムに上りて群衆の中に其の父母に離れたる時の狀況是れのみ。聖書に曰く

三日の后ち殿にて遇ふ。彼れ教師の中に坐し、且つ聽き且つ問ひ居たり。聞く者皆な其の智慧と其の應答とを奇しとせり。兩親これを見て駭き、母かれに曰けるは、子よ何ぞ我儕にかく行たるや。爾の父と我と憂へて爾を尋ねたり。イエス答へけるは何故われを尋ぬるや。我は我父の事を務むべきを知らざる乎。然れども兩親は其の語る事を曉らず、イエスこれと共に下りナザレに歸りて彼等に循ひ居れり。

福音記者が個人的よりは寧ろ公共的なる、此の短き事蹟の外は、其の幼時と壯年の事に關し、何等の記錄をもあさりし所以のものは、主が公共的の生涯は、尤も多く吾人に關係を有するを以て、特更に吾人の注意を此一事に引きたるに依るなるべし。うは兎も角も、吾人若し赤心を以て基督の足迹に從ひ、其教の主眼たる「天に在す爾曹の父の完全きが如く爾曹も完全くすべし」との教訓を奉戴し、此の最大理想に向つて進まんと欲せば、主が其の生涯の大戰の爲めに、其の武器を鍛煉し、其の品性を修養せられたる、其の少壯の時代に向つて、幾度か吾人の眼光を注射せざらんと欲する

も得べからざるあり。

然るに此の短かき宮殿の記事たる、偶ま以て講究者れ心裡に、混雑と失望とを喚起するに過ぎざるあり。一見すれば十二歳の幼童にして、其の父母の知らざる内ゐ、其れ承諾を得る事おく、獨り知らざる市中に留まるが如きい、大膽の点に於てよし幾分か取るべき所あるにもせよ、頗る我儘にして且つ丈夫らしからざるを感せずんばあらざるあり。特に彼の「爾れ父と我と憂へて汝を尋ねたり」との愛深き母マリヤれ言に答へて「何故我を尋ぬるや我い我父の事を務むべき事を知らざるか」との言を發するが如きい、如何にも思慮淺く、且つ不作法なるが如きれ感を起さずんばあらざるあり。

（附言）「我父れ事」とい「我父の家にある」と譯する方適當あり。

此れ一見して完全なる丈夫膽と矛盾するが如き、基督の言行に關する余が疑惑い、彼の有名なるホルマンハントれキリスト宮殿問答の畫像を見るに及び、其の驚くべき洞察と秀美とによりて、全然氷解する事を得たり。

兎に角此の畫に現はれたる幼童基督の顔色と容貌とい、此の記事の眞意をして、余が腦中に明了あらしめたり。特に基督が其の時より其の公然事業に着手する迄の間に經過せる、十八年間の生涯に關し、余をして釋然大に悟る所あらしめたり。思ふに己が成就すべき事業の眞意と領分とは、怖るべき壯嚴と艱難と偉大とを以て、今や此の童子の頭中に曙光を放たんとす。其の初めてエルサレムと其の宮殿とを目擊するや、一種新らしき奇異なる感想い其の心に起れり。彼れが熱心なる問に答へたる博士等の應答い、已に漠然たりとも其の心中に萌し居りたる、自覺心を燃へ上らしめぬ。即ち彼れが居常遊戯を共にせるの童友や、又い膝下に鞠育せられたる兩親等とい、自己は何となく同一あらざるものありとの、一種の奇異なる自覺心に、一條の導火を與へたるあり。

余輩い屢々兒童等の中に、自己の天職を認識する事により、其の將來の生

涯をば一變し去るの場合を見聞する事あり。勿論余輩い自己い如何なるものあるか、我が天任い何ぞやとの問が、畧ぼ何歳の時に至つて、初めて起るべきものあるやを証明する事能いざるべし。然れども多くの兒童中にい、未だ十二歳の齢に達せざる中に、已に此の自覺心を起したるものあるい、毫も疑を容れざるなり。果して然らば、基督が、其の國民の救濟を記念せる此の大祭筵に列するに方り、彼は已に神が曾てモーセサミエルダビデエリヤ若くはユダスマカビヤの如き、彼の腦裡に常に往來せる、愛國者、預言者、帝王、又い軍士ゐ授け玉へる聖職を思ひ、自己も亦此の神聖ある事業に一身を捧げんとするの聖望が、自己の心中に轟ける事を、自覺し居れりと思惟するも、敢て過言にあらざるべし。此の大祭の榮華の中に、彼い神の撰び玉へる國民が、未だ曾て史上にうの比を見ざる程ある、非常ある壓制と束縛との下に、苦吟するに實況を見たり。然り而して禮拜者の群衆と、宮殿に立つて人民を教ゆる教師等に關し、此の聖き市城の中に見聞せる凡ての事柄や、「全世界の喜」と歌われたる、聖山シオンを初めて見たる時の感想や、若くい又一方にい熱心ある商賣と、惡むべき拜金崇と、酷虐無慈ある犧牲の屠殺とを目擊すると同時に、又一方ゐい神の民をして、最后の救拯と凱旋とを受けしむべき、國民の大救主メッサイヤを渴望する、一般人民の熱切ある聖望とを目擊し、此の奇怪ある反對の事物が、紛々として混同せる狀況を實見するに至りてや、彼をが心中必ずや、更に一種の新らしき疑問を起せしあるべし。疑問とい他あし、彼れが已に其の心裡に自覺せる、異樣の聲や、曾にペブリューの童兒等が、誰れしも抱き得るが如き志望たるに止まらず、實に是れ特別ある一個の天任にていあらざるべきか。此の廣大無數ある群衆の中、實に我こそい、此の偉大ある事業を委ねられたるものにして、斯くも熱心に確實に渴望せられたる、此の民い救濟主にていあらざるべきか。是れ實に至大緊要い最大問題たりしなり。

かゝる至大ある幻想ぞ、一少年れ心れ眼に現映せる時に際し、凡てれ骨肉

れ關係も、一時ハ其れ繫鎖をバ失ふべく、暫時の間ハ其の親密ある情愛すら、忘却するに至れるや必せり。母マリヤの急卒なる言語によりて、忽ち自己に復しつゝ、恍惚として半バ夢中にあるが如く、「何故我を尋ぬるや我ハ我が父の家に在りて其の業を務むべき事を知らざるや」との返答を發するも、能く其の當時の狀況を記憶せば、敢て頑陋わして無作法ありと輕評すべきにあらざるなり。

斯くて此の新らしき問題と、怪しむべき奇觀とに充されつゝ、彼れハ其の父母と共にガリラヤの僻村に歸り行き、彼等に事へぬ。而して暗黑なる幕ハ、下りて其の幼時、青年、壯年の時代を蔽へり。然りと雖も、此等の簡單ある四福音書の記事ハ、一として吾人が主イエスキリストの生涯を追迹するに於て、至大緊要なる關係を有せざるものなきを以て考ふれバ、主が此のエルサレムの最初の上京たり、實に其の生涯の一大危期に起りたるものにして、吾人人類の運命を決定する、彼れが一生の事業に取りて、尤も直接なる關係を有せるものなる事を見るに足る。果して然らバ吾人ハ知る、此時主が幼少なる心裡に起れる此の問題ハ、爾來決して再ひ其の心中を離れ去りしの事なきを。此の問題や實に日に月に劇烈の度を加へ、勢力と重量とを次第に增し來りて、常に彼れが心中に浮び出でぬ。而して此國の預言者、詩人、教師等が、凡ての人の起居心中を知り、之を支配し玉ふとして、彼へ來りたる全能の神に、己が心を一任するの度、日に月に益大なるに從ひ彼れが自覺心ハ次第に勢力と權利とを增せり。而して万事心裡に轟く神の聲に服從し、自己の意志を放棄する、慣性、次第に完全に進むに從ひ、換言すれば、神の聲ハ益自己の一部と化成し來るに及びて、此の心中の自覺の聲ハ、益明らかに躍き、亘り來りしなるべし。

然り而して彼ハ凡ての事に於て、吾等の如く試みられ玉へる以上ハ、年々月々長ずるに從つて、其の心に現出せる、其の事業の危險困難と、絶望寂寥と、而かも其の偉大壯嚴なるとを感得するに從ひ、彼が人性の弱点ハ、幾度

かゝ爲めに逡巡躊躇の念を起し、若し神にして許し玉はゞ、如何にもして此の恐るべき大事業より、脱し去らん事を望みしや、蓋し吾人の疑を容れざる所たるなり。

是に於て吾人は能く其の後ち十有八年の間、主が心理の戰爭と鍛煉とを想像する事を得べし。此の聲や常に耳邊に響き亘りぬ。而して彼れゝ、幼年、青年、壯年の時代を經過し、其時代々々に特有なる、多くの誘惑に試煉せられつゝ、使徒保羅が凡での人の受け得べしと揚言せる「主に於ける力」即ち完全に神意に服從するの覺悟を以て、忠實に日常の義務を成し遂ぐるによつて、上より來る偉大なる勢力によりて、彼れ勇ましくも、凡ての試煉に打ち勝ち終りぬ。試みに此れ永續せる十八年間れ試煉を一考し見よ、而して完全なる丈夫膽れ理想として、天下何れの處にか、是に優るものありやを自問自答し來れ。

ナザレ寒村三十年間の生涯が、極めて退隱的に經過せられたるや、固より疑を容れず。彼れが洗禮れ後ち、故郷ナザレに來りて道を傳ふるや、村人皆な駭き怒つて、之を放逐せるれ一事れ、以て其れ居常、何等の人目を憑くに足るの行蹟なく、其の父母に事へて、單純なる農夫の生涯を送り居たるを証するに足れり。然りと雖も、彼の如きの大人物が、幼時より壯年に至るまで、毫も鄕人の注意を惹く事なくして過ぎたらんとは、頗る想像し難き假說ならずや。余を以て之を見れば、如何に非常なる謙退の生涯をなしたりとて、彼れゝ、此のナザレの村落に彼に聖書を敎へたる敎師より、彼れと共に聖書を學びたる兒童に至るまで、或ゝ日常の職業により、彼と交際せる村人等の心中に、何等の感覺をも起さしめたる事なきの理由ゝあらざるなり。少なくとも彼れゝ、凡ての機會を利用して、勉學の一事を勉めたる事ゝ、其の傳道の當初より、已に其の國の律法と歷史とに、通曉せるを以て証するに足れり。而して恍禮の后ち、直ちに彼れが遭遇せる、彼の危急なる野の試煉の如きゝ、是れ已に年來心中に連續せる戰爭の最後の合戰にして、

以て幼時より壯年に至るまでの、心裡の戰狀を推察するゐ足れり。誰れか此の試誘を以て、當時人心を收攬せる大預言者「バプテスマ」のヨハネが來るべき基督い即ち此人なりとて、彼を世に紹介せるによりて、初めて起りたる心中の爭鬪と思ふものあらんや。勿論ヨハネの公言や、實に基督の心に殘れる最后の疑惑を除去し去り、是迄忍耐に待ち詫びたる、出陣の兆候を認め、時至れり、我終に此の退隱の生涯より、一躍躍起せざるを得ずとの決心を起さしめたるや、固より疑を容れざるなり。然れども此の時や、早晩到着せざるを得ずとの一片の確信い、夙に其の心に成長し有りしなり。是れが、故に、時機一たび至るや、彼れい全き準備を以て起てり。

試みに彼がナザレに於ける劈頭第一の公共的說敎を看よ。彼い直ちに凡ての人民が抱きつゝありたる希望の成就せる事を告白し、毫も躊躇する所なく、何等の冒頭をも用ゆる事なく、短刀直入全き確信を以て、天國の福音を明白に宣傳して曰く「時至りぬ神の國い近けり」かくて彼いイザヤ書を引きて其の最初の演題と定めぬ。曰く「主の靈我に在す、故に貧者に福音を宣べ傳へん事を、我に膏を沃ぎて任じ、心の傷める者を醫し、囚人に釋されん事と、瞽者に見させん事を示し、又壓制せらるゝものを縱ち、主の禧年を宣傳へんが爲めに我を遣はせり」と、更に進んで「此の錄されたる事い今日なんぢ等の前に應れり」と證明せり。此後數日にして彼い直ちに所謂山上の說敎をなせり。是れ四福音書に於て余輩の詳細に知る所にして、千歲一時、其れ天國は眞意と性質と主義とを天下万世に宣傳しぬ。見よ、彼れが說敎中自己の何者たるか、如何なる使命を宣傳すべきものあるやの點に關し、一點の躊躇する所なく、疑懼する所なく、又た曖昧なる箇所なきの一事を注意せよ。曰く「我れ律法と預言者を廢る爲に來れりと意ふなかれ、我れ來りて之を廢つるにあらず、成就せんが爲めなり」又曰く「わが來るい罪ある人を招きて悔改めさせんが爲なり」又曰く「我を信ずる者い永生あり、彼等何時までも亡びず、亦これを我手より奪ふ者なし」と。

斯くて彼は完全なる武具を裝ひて戰場に躍出せり。然り而して、吾人若し其の十八年間ゐ、主が經過せる鍛煉い、果して如何なるものなりしかを理解せん事を欲せば、須らく能く此の基督が、最初より自己の天職と位地とを確認せるの一事、即ち彼れが自ら成就せんと欲したる事業を洞察し、又此を成就するの方法を經綸せる、此の一事に注目せざる可らざるなり。

敢て問ふ、主が此の完全なる洞察と自信とは、果して如何なる所よりか來れる。「彼の小舟や小山の傍に立ちて說教しつゝある、彼の年若き一農夫は、我等が中の最も學識ある博士等の主張する傳說を排除して、是れイスラエルの神が其の律法に依つて我等に敎へ玉ふ所にあらず、我等も我等の祖先等も、皆な是れ信ずべからざるものを信ぜるなりと告げたり。而して彼れ自ら云ふ、我こそい誠に神の聖旨を世に知らしむるものゐりと。實に彼れい權威を持てるものゝ如く、我等に敎へり。誰れか此れ權威を彼れに與へしやや」とは思ふに此れ、當時の人々が、基督に關して互ふ相語れる所にして、吾人い再三再四、基督に對つて同樣の問の發せられたるを見るなり。是れ實に最も自然にして、又最も緊要なる問題にして、啻に當時の人民の抱ける所たるのみゐらず、必ずや幾度も、基督彼れ自身の、自問自答せる所たるや知るべきゐり。彼れがガリラヤの衆會に立ち、山上の群集に向ひ、將た又湖水に近傍ゐ在りて、絕對的なる權威の風采を以て、侃々諤々此れ福音を宣傳するに至れるは、必ずや是れ、彼れが明白ゐる確答を、此れ心中に疑問に與へたるれ後たるや、固より論を俟たざるなり。「誰れか汝に此れ權威を與へたるか」吾人が敬虔れ念を以て、遙かに想像する所ゐれば、主が此れ問題に接して、明答を與ふるに至るまで、必ずや幾多の非常なる鍛煉と爭鬪とを經過せるや明けし。疑問一決、彼れい實に瞬時の躊躇なく、寸毫の疑惑ゐく、時至れり、我終に此事を以て自ら任ぜざるべからずとの一聲を放つて、直進猛行、其の震天動地の大使命を告白するに至れるなり。抑も、此の心靈の鍛煉たる、啻に基督ゐ於てのみ存せるにゐらず、皆な是れ

吾人各自が、各其の應分の程度に於て、遭遇せざるべからざる所のものゐして、感謝すべきは、野の試誘の記事に於て、明白に、吾人が研究の材料を、與へられたるの一事是れあり。

思ふゐ此の問題たる、基督の齡の次第に長ずるに從ひ、益巧みなる形態を以て、彼を襲ひ來れるゐるべし。誘ふもの彼ゐ語つて曰へく、

「汝は實に此の腐敗せる、而かも束縛せられたる、此の國民と世界の萬國とを救濟すべきの人なるか。縱令此等の希望を抱ける、彼の前代の預言者等にして、恍惚なる嵐想者にあらずとするも、少なくとも、汝、ハ實ゐ其の恍惚たる空想を、夢ひるものゐてハあらざるか。莫遮、汝若し自ら其人なりと揚言する以上は、何ぞ速かに其の休徴を示さゞるか。汝が名の証憑を明示して、以て吾曹を滿足せしめよ。見よ此處に此等の物体あり。汝若し其人たらば、是等のもの皆な汝の意に從ふべし。速かに此等の物の上に、汝が力を現はし見よ。彼の人命を維持する日常の食料の如き、汝が撰ぶべき好材料にあらずや。又世にハ神の使命に役すといふ、目ゐ見へざる靈性の勢力ありと傳ふ。汝若し神の子ゐらば、是亦汝が意の如くに使役し得るにあらずや。速やかに汝が彼等を支配するの權威あるを証せよ。汝何故に遲疑するや、何の躊躇する所やある。汝は此の民の重荷が輕減せられたりと思ふや。眼を放ちて見よ、羅馬人ハ年々歳々、其の暴虐を增すにはあらずや。收税吏ハ日に月ゐ殘忍酷薄を加ふるにあらずや。學者とパリサイの人等ハ、次第に僞善に增長するにあらずや。然り、而して、汝ハ同胞なる此の人民等ハ、時々刻々、墜落に陷り滅亡に趨くにあらずや。今や汝ハ凡ての人性の發達を遂げたる、血氣壯んの一男兒ゐらずや。然るに汝ハ何が故に、汝が父なりと自信する神の事業が今や汝の四方に横ハるに、空しく手を拱ひて傍觀する事をかなす。嗚呼天下一人として主の助に赴くものなし、汝以て如何せんとするか」。

嗚呼余ハ余が筆の鈍きを歎せざるを得ざるゐり。只夫れ如何に不完全た

りとも、基督が此等の曖昧模糊なる年月の間に處し、凡ての誘惑と疑問と
に對し、忍耐持久、能く其の時の至るを待ち、心耳に轟ける此の聲や、終ゐ詐
りの聲たらざりしを、確信するに至るまで、着々として自己の能力を修養
し、輕舉大事を誤るなく、疑懼機會を失ゐふなく、悠然泰然、能く其の神意を
奉戴せられたるの蹤跡と、其の彼をして然るを得せしめたる所以の勢力
を知り、以て彼れが丈夫膽の根原ゐ洞達するの端緒を、讀者の胸中ゐ開く
事を得べ即ち足れり。

生涯の戰場に臨まんとするものが、其の準備の時に方り、大に猛省すべき
ゐ、實に此点に於て存す。倉卒と不信、よし是れ臆病者の特性たらざるにも
せよ、明らかに薄志弱行の兆候たるゐり。假令如何ゐる剛膽の丈夫に於け
るも、若し此の過ゐ陷るに於てゐ、彼れ必ずや失敗せざるを得ず。而して其
の事業や、改築せられざるを得ざるなり。基督の生涯に在りてゐ、吾人ゐ彼
れが三十歳に達するまで、寸毫も此の軟弱と臆病との兆候を、發見する事
能はざるゐり。吾人が知り得たる所と、推測し得る所とによりて考ふれば、
基督ゐ、毫も倉忽の行爲をゐさず、孤疑の意を起さず、驚くべきの堅忍を以
て、自己の事業の何たるやに係ゐらず、之れが準備に全力を盡し、以て神意
の如何を待てり。是を以て、彼れが事業ゐ初めより完全ゐり、其の公共的生
涯の始終を貫き、彼れゐ瞬時も躊躇せる所ゐく、動搖せる所ゐかりき、否ゐ
彼れが一たび口外せる所ゐ、一言たりとも未だ曾て之を曲げ、之を變せん
と欲せるの跡だにもなかりき。斯くて彼れゐ世の終りに至るまで、幼年青
年壯年の時代を一貫せる勇氣と丈夫膽の完全ゐる模範として、天下萬世
に嶄立せり。

主の公共的の生涯に移らんとするに先ち、吾人が數言を費やさんと欲す
る一事ゐり。是れ吾人が主眼ゐる問題とゐ、少しく關係遠き事ゐれ共、敢て
又た無益の辨にゐらざるべし。

是れ他ゐし、凡ての基督信徒が信ずる所にして、主が其の公共的の生涯中、

或る程度内にハ自由に行ひ玉ひたりとおす、奇跡的能力即ち是あり。先づ彼ハ常に此の能力を自覺せりや、若し自覺せしとせば、彼れハ其の「バプテスマ」を受けて、天職の事業に着手せる以前にも、之を行ひ玉ひたるか。此点に關してハ、吾人聖書の中より、何等の直接ある答辨をも受くる事能ハざるを以て、吾人ハ已を得ず、吾人各自の判斷と理性とおよりて、之れが結論を推定するに過ぎざるあり。故に吾人が如何程眞面目に此れが眞理を探知せんと欲するも、各自の結論に於て、幾分か相徑庭する事あるを免れざるあり。

然れども一二の事柄ハ、余に取りて頗る明白ありとす。第一に、彼が自己と神との關係を自覺するに至れるは、吾人各自が之を自覺すると、同一あるべき方法および、なる事是れあり。如何とあれば若し此の一事にして眞あらずんば、彼ハ到底吾人の模範たる事能ハず。彼れハ吾等の如く試みられたりとあるに聽ハざれば、あり。然り吾人も基督も、均しく自然の方法によりて、自己と神との關係を自覺するに至れるあり。只だ夫れ彼我兩者の間に於て、大なる徑庭を生ずる所以のものハ、其の方法の用法同じからざればあり、若し此の方法にして、眞に能く神の心に從ひて用ゆるを得るか、吾人は僅かに自己の上に、又其の周圍の境遇の上に、主權を振ふ事を得べく、啻に此等に制御せられざるのみあらず、反つて之を制御するを得るに至るや、蓋し疑を容れざるあり。「曾て此の天地が、神の手中に流動して、其の思ひの儘に、形を定め玉へるが如く、吾人若し神の性質を以て天地に向へば、天地一として我が意の如くあらざるはあし」とハ是れエマルソンが驚くべきの思想ありと雖も、熟々之を吾人の經驗と理性とに反照するに、大に其の言の空あらざるを知るべし。此の法則に對する尤も見易すき例証として、試に人類が鳥獸に於ける關係を見よ、或る人は容易に鳥獸をして己が友たらしむる事を得るに、或る人ハ反つて彼等の恐怖と憎惡とを招き、犬猫すら容易に其の傍らに來らざるが如き事あり。吾人若し前者の例証を求

めんと欲せば、必ずしも古昔の事蹟に遡ぼりて、彼のセバイドの仙人若くハシヽの聖フランシスの傳說を引用するに及ばざるあり。吾人ハ已にカウパーが多情ある書簡と、優美ある詩歌とによりて、其の飼養せる三頭の兎の、如何に從順親密ありしかを知る。又彼のウオタートンが其の田舍の邸宅に養あへる鳥獸に關し、彼れが發せる多涙の文辭を讀む事を得べし。若くは又た野の栗鼠が來りて共に其の家に住まんと欲するを禁ずる事能ハず、魚ハ躍つて其の舟中に入り、手にて捕へ靜かに之を水中に放ち去る迄ハ、毫も動かずして横はれりと云ふ、彼のソーローの談話の如き、皆あ以て之を証する足れり、思ふに吾人は舊約の書に錄されたる以下の古語が、現在吾人の目前に、再三再四演出せられつゝあるを見るあり。曰く

爾ハ滅亡と饑饉に笑ひ、地上の猛獸を怖れざるべし。蓋ハ汝ハ原の石と謀を通じ、野の猛獸は汝と共に平和を樂しむべければあり。

余も亦自ら屢々此等の實例を目擊せるを記憶せり。或る男兒ハ常に鼠や蛙や蛇の如きと友たりき。而して其の「ポケット」の中に、常に此等の一疋を入れ置けり。又た一人の家僕は、其の飼養庭若くハ原野に出で行く毎に、鳩は來つて其の肩にとまり、其の頰に接して安らかに眠れるを常とせり。嗚呼誰れか此の現象を說明し得んや。余謂へらく、此れが解釋たる只だ此の一事あるのみ。曰く此等獸類の上に一種の力を有し、能く之を馴着せしめ得るれ人や、彼等が此等れ動物に對するに當り、必ずや天れ造物主が求め玉ふ如に感じ、又た其の如くに此を取扱へり。即ち神の造り玉へる此等の受造物に接するや、自ら識らざるも、眞に忠實に神の心の儘に從ひしなり、換言すれば、彼等に對して眞誠ある關係に立ちしものにして、所謂野の猛獸ハ、彼等と共に平和を樂しめるものたるに外あらざるなり。此と等しく野の石ハ、地質學者と謀を通じ、草木ハ植物學者と好を結び、土石空氣の成分ハ、化學者に向つて其の心情を吐露しつゝ居るなり。斯くて彼等ハ其の自覺の有無に係ハらず、眞に能く神の心と其の方法とに從ふに於てハ、神

が遺れる此の天地の各部分い、次第に其の秘密と奥妙とを、彼等の謙遜忍耐ある心の眼に明示するあり。記憶せよ謙遜と忍耐、是ゞ此れ成功せる學者の性格にして、而かも吾人が外界の事物に接する眞正の心情たるを。夫れ吾人各自が感ずる所い、是れ皆ある基督の感ずる所あり。吾人若し公平無私ある心を以て、自ら其の身に眞ありと信ずる所い、必ず是れ基督に在りても、同じく其の然りし所あるや、疑を容れざるあり。果して然らば、吾人い假令彼のキリストが幼童たりし時、戯に造りし粘土の鳥が、忽ちにして羽毛を生じ、彼れが園に囀り謳へるが如き、無根の傳説を信せざるにしても、アルビヤの燕とベニスの群羊が、聖フランシスの説教中、靜かに其の囀りを止め、其の聲を默せりと云ふに付きて考ふるも、キリストが此等中古の聖徒等や、若くい現代の博物學者等に比較して、遙かに其の神の世界に同情を表せる事、大且つ完かりしを信ずるに於ていゝ、彼れが幼年の時代より、已に遙かに異常ある權力を、世界の事物の上に有せるを信ずるも、敢て不當の言にあらざるべし。已に然らば彼れが人間の心情と意志とを支配するの力、實に莫大あるものありて存せるや知るべきのみ。吾人い知る基督が人心に及ぼすの權威と其の異能とい、固より其の鳥獸に於けるが如きの比にあらず。彼れが在世の當時より、万世の今日に至るまで、實に驚くべく怪しむべきものあつて存するを見るあり。如何とあれば基督の來るや、實に此の神に背ける人心を救いんが爲めにして、此の神意に背戻する事たるや、余輩未だ他の受造物間に是あるを見ざれば也。

是に至つて吾人い知る、此等奇跡的の能力たる、主が幼少の時よりして、既に已に彼れが一身に具はり在り、日に月に此の力の強大あるに從ひ、彼れい益此を自覺すると共に、妄りに此自己の好奇心と、利己心との爲めに使用せず、只だ其の心中の神の聲が、求むる處に從ひて、之を現いすの決意をして、愈益強固あらしめたりとの結論の、終に避くべかざるの一事是れあり。然り而して彼が三十歳の齢に達し、其の天職に從事するに至り、直ちに

完全なる自信力を以て、之を使用し玉ふ迄に、慎んで之を試みんとも為し玉へざりしに、其の完全なる服從と、子たるものゝ本領として、實に左もあるべしと推定せざるを得ざるなり。若し彼れにして早くも已に此力を現はせりとするか、彼れが傳道に必ずや早く初まらざるを得ず。即ち彼れが啻に其の國民のみならず、世界万民の生命と信仰とを改造し、地平線上更に又一歩を高めて、益々高遠の域に進ましむるの大事業に着手するの方法と、此れが時機との未だ熟せざるに、早くも其の舞臺に躍出せざるを得ざるなり。如何となれば、彼れが三十歳にして、初めて行へる彼の奇跡と說教にして、彼の如きの希望と喜悅と、疑惑と憤懣とを猶太人の心中に釀酵せしめたりとなさば、若し彼れが二十歳の時に於て、之を行ひたりとなすも、其の人目を惹き、人心を攪亂するに於て、毫も差あるを信ずる事能はざれば、乃ち知る、主は此點に於ても、實に能く神の意を待ち望めり。即ち是れ働くべきの時一たび來るや、能く彼れが神の如きの力を以て働き得たる所以なり。

思ふに此の待望と準備とは、彼れが信仰の最高なる試金石たりしなるべし。能く此の試煉に堪へたるは即ち、バンヤンが所謂「人心の最要塞」を保持せるものにして、彼れが幼年の戰爭は、實に此の一方面にありしなるべし。乃ち知る誘惑者の全力を込めたる攻擊は、再三再四此の要塞に向つて注射せられたり。而して其の城兵や、始終能く之れが防禦に堪へ、以て其の錦旗を翻へしつゝ、凱旋の軍陣に勇進するの鍛煉をなせり。

基督が凡ての物体と人心との上に、絶大異常の權力を振ひしの一事や、固より疑を容れずと雖も、更に進んで彼れは人類が、未だ曾て一度も行ひ能はざりし、又一度も行ひたるの事なき、所謂天然以上の一種特別なる奇跡力を有せりとの推定を下すに至りては、吾人は到底其の然る所以を見る事能はざるなり。反つて凡ての証據の明示する所は、其の反對に出で、其の吾人に表示する處、必竟左の如し。曰く若し夫れ吾人にして、只だ吾等の衷

心に、眞に達すべきの點ありと、認識する所の標準に迄、進達するを得たりとするか、即ち吾人が心裡にさゝやく、神の聲を自覺するの日より、能く其の命令と勸說とに、從ひ盡くすを得たりとするか、換言すれば、吾人の意志が、最初より、主基督の意志の如くに、全く神の意志と合同するの鍛煉を積みたりしを得ば、則ち余輩と雖も主基督と、其の高弟等が實行し玉へるが如く、奇跡と休徵とを現いすに足るの能力と、又之を敢てするの勇氣とを、有するに至るや、毫も疑ふべきの理由あるを見ざるなり。

第四章。基督の天職。

吹けよ汝神の喊叫を、出て來れ、
大なる主義よ、疾く來りて、
我等を隊伍に組めよ、王よ我君。

ながつわものゝ憂いて汝を待ちわびぬ。
終に待ち疲れたる國民の上に、其渴望せる吉報や到りぬ。ヨルダンの河向ふなる、寂しき邊りに呼ぶ聲あり。此地やガリラヤ地方の巡禮者が、エルサレムの祭禮に往復する要路に當る。而して其聲や、神の國ゝ近づけり」と宣傳するにてあり。其風聞ゝ直に主府に達しぬ。而してエルサレムユダヤ及びヨルダン河の周圍にある凡ての地方より、人民ゝ皆之を聞かんとて出て行けり。而して之を聽くや、皆熱心に此神の王國に一ヶの位地を有せんものをと、先を爭ふて洗禮を受けたり。彼が次第に其勢力を增し、邦の主權者、祭司、學者、議員等も律法を知らざる人民と共に、之が爲めに聳動せら

クロウ

るゝに及んで祭司とレビは人を直ちにエルサレムより遣はされて、其使命は如何を訊問せり。彼等問て曰く「汝は誰なるか我等の許しなく汝が宣べ傳ふる此國は何なるか」と。此風聞や直に北方にも廣まれり。是に於てか蔑視せられたるガリラヤは住民等も、湖水地方や、或は半ば異邦的なる都邑より、下り來つて自己は爲めに此聲を聽んと欲せり。現にかれ單純剛毅なるアンデレシモンペテロは如きすら、來つて此は說教者は弟子とはなりぬ。然り而して彼れが名聲は、漸くにして道路と湖岸は都邑より、ガリラヤは村落に傳はり。ナザレ寒村、木匠は小屋なる、青年イエスは耳朶に達せり。彼れも亦之を聞ひて心を動せり。而して働きは時機終に來れり。イスラエルは神終に此民を捨てざるなりと。希望滿々、彼亦ヨルダンに向て出發せり。彼れが其自らも此國民は懺悔と舊與とに與らんもはをとバタバラ指して進みける途中。想ふに彼れは此至大なる劇場の最要なる役向は必竟他人の身上に委ねられたるが如きを思ひ。心窃かに喜悅の念に堪へざるものありしならん歟。夫れ人は眞乎大事業の爲めに鍛煉せらるゝこと益深く。其の之に適することは益大なれば。自己が不適任を自覺し。我れ竟に其人にあらずとの念を起し。能ふべくんば、一身を其は中に投入せざらんと欲する事益強大なるべきものなり。換言すれば自己は責任を感ずること益大なるや。其自らが無力を感ずること又益大なるもはなり。彼の大業の危機終に近づくに際し「然り余は汝の杯を飲まん。其洗禮を余に授けよ」と、直ちに答へて立たんものは必竟是れ半醉半醒、只だ其目的の榮譽燦爛たるを一瞥し。其此に達する迄の危險困難を覺知計算せざりし輩の、盲目なる熱心たるに過ぎざるなり。

然るに基督に在りては吾人は此持久忍耐、數十年間は試煉の末。毫も名譽心と自慢心の跟跡あるを見ず。彼は靜かに其國民と萬國の民をして、目に見ゆる凡ての事物と偶像とに仕事するの紐絆を脫せしめ。彼等が靈魂の唯一の父に歸着せしめて。眞の天國に導き至らんとするの大事業に關し。

具さに其道路の里程を度り其危險の實價を計算せり實に彼れは彼れが眼前に横ゐれる此事業に對しては自らが幼時より同室の中に鞠育せられたる同胞の兄弟や若くゐ同村に住居せる鄕黨れ人々等に比較して遙に自己の適切なるものあることを熟知せざるを得ざりしと雖も然れども又彼が心耳に轟ける其聲と自己を修煉し來りたる其靈智が全ユダヤの國民中苟くも開ける心と鋭き耳のある限りゐ何處か如何なる處にか必ずや他の謙遜にして勇氣ある心靈にも等しく轟き亘り同しく修煉を積み在るべしとゐ如何にしても信せざるを得ざりしなるべし人類中最も謙遜にして邪心なき此人にして自己の外イスラエルの全國民中一人として神意に對する此の完全なる服從を有するものあらざるべしとゐ如何にしても信ずること能ゐざりしならん已に然り彼れゐ此野に呼べる預言者こそ即ち絶大の濟民者來らんとする「メッサイヤ」にゐあらざるかと滿腔の希望を抱きつゝ能ふべくんば自己も亦た己れよりも大なる此人の職尾に附して全杯の力を奮ひつゝ眞正忠實なる助力を與へんものをと其歩ゐ自らヨルダンに向つて急ぎしなるべし如何となれば キリストゐ其ベサバラに着する日までゐヨハネが此大號を拒絶せることを耳にし玉はざるを記憶せざる可らざれば なり實にヨハネがエルサレムの使者に對へて「或ゐ彼れにあらず」と告白せるゐ恰かも是れ基督が彼の許に到着せる當日ありしなり。

基督未だバプテスマのヨハネに會ゐざる前にゐかゝる考が果して彼の心に起り來りかゝる希望が果して彼れが胸に充ちたるにもせよ是れ實に少時の間のみ此喜悅と希望とゐ忽ちにして排除されぬ而して彼れゐ再び獨り寂寞の地に殘されて以前に勝れる一層の明晰を以て其大事業の面前に孤立しぬ是に於てか假令神の子たる靈性を具へたるも今や世界に率先して此事業の大任を負せらるゝや彼れが肉性の弱点ゐ端なくも彼をして戰慄怛喪せしめんとなせり如何となれば ヨハネゐ一見直ち

に彼を認識し。群衆の中より之を撰拔し。而して公衆に宣言して曰く「神の小羊を見よ。彼れは此れなり。神の靈火を以てバプテスマを施さんものは彼れなり。吾等の預言者が預言し來りたる救世主此處に在り」と然り而して不思議なる身外の候徴と。其の眞心の證明とにより。基督は忽ち釋然としてヨハネの言の眞理なるを確認したり。即ち天下彼の外に一人の此任に當るものなく。然り而して其時や今。慥かに眼前に到着したりと大悟したり。

主が初めて其天職を實覺し。數年は間或は其れ眞ならんかと感じ在りたる此事が。愈明らかに其衷心に確認せらるゝにより。彼れは駭然として一時其心膽を寒からしめ。且つ烈しく試煉は鞭を感じたることや。是れ啻に經驗上の推測に基くはみならず。聖經は談話が明らかに告知する所たるなり。如何となれば彼れが釋然此眞理を大悟するや。直ちに神は招き玉へる天職と事業とを承諾し。權威を以て「暫く許せ」とヨハネに告げ玉ひしと

は云へども。然れども此は天任は直接なる結果や。彼を逐ふて深く原野に退かしめたり。此處に彼れは此靜肅なる單獨に在りて。今一度び此大事件を沈考し。最終最後に此は恐るべき秘義と角鬪し。全然之れを制服せしめんとせり。而して野は試煉は此は談話たる。固より多くの秘義を含有すとは雖も。其啻に主が當時は危機はみならず。前後の生涯は歷史の上に。而して世界の救濟と其之を救濟するは方法は上に。非常なる光明を流せるは點や。實に無限の價値あるもはなり。嗚呼。然り世界は救濟たる啻に基督一人の事業にあらず。吾人男女は區別なく。各其分に應じて盡すべきは部分を有せり。蓋し主の地上は生涯たる眞正丈夫膽は摸範にして。人たるは本分を活ける言行に發現せしめたるもは。畧言すれば。誘惑に對する勝利は一大戰陣たりしなり。若し夫れ此は大勇將は配下に立ち。心身を捧げて救世は大業に殉するは事に至りては則ち是れ吾人各自は任を知らずや。彼れは今日ヨハネが自己の就きて公衆に宣言せることによりて。明日は則

自己は周圍に群集し來らんとする人民を避けて。直ちに原野に退き入れり。余輩は愼んで彼に原野に從ひ行かん。

日々爭鬪は彼が心理に進行せり。彼れは其は不充分なる食物と連續せる默考とにより太く疲勞せり。而して其は体は衰ふるに從ひ、疑惑は念は益其力を加へぬ。誘ふ者は常に彼れは傍に在り。今や一度び自負は所業をなさしむるによりて、彼れか生涯を顚覆せしめんと隙を窺ひぬ。彼れか十二歳は時エルサレムに上りしより、爾來廿年間。常に其心に往來せる各種は問題と疑惑とは。今や實に其は燒点に集合せり。嘲笑は聲は舊は如く其心に聞へり。否な益侮辱と煽動は鋭鋒を以て。彼れが耳邊に轟き亘れり。其言に曰く

汝は眞に待ち望まるる神は子メサイヤあるか。汝は多年は間ガリラヤは村落に一農民として住居せり。其間果して何程は証據を目擊せりや。野に呼べる此は狂人は言なるか。彼れは汝が從兄弟にあらずや。其有力なる說敎者たるや疑なしと雖も。然れども是れ頑陋偏執其衣食たる狂人は如く。而かも國民は思想と學識は中心たる聖城より距りたる村落に生長し。幼時より盧妄なる想像を養成し來りたる、一種は奇人たるにあらずや。天より降りし鳩は如き休徵なるか。將た又た汝は外誰れも聞かざりし彼の天外の聲か。然りかゝる休徵や必ずしも汝に限らず。人自らを欺くの時に當りてや、多く此等の事に遇ふものあり。而かも各自の想像は各種の意義を附會するは、吾人の屢々目擊する所にあらずや。よし一歩を讓りて此等の証言と休徵異聲等が。恰も能く汝が三十年間の確信と符合するとするか。然らば則ち汝自身の爲めあらずとも。少くとも他人の爲めに、其の確信の僞りあらざるを證明し見よ。一時も早く汝自身の確信を慥かめよ。若し夫れ一歩を誤らば汝が同胞を滅亡に陷れんとす。汝能く之を忍ぶや否や。汝は今や原野の中に饑餓しつゝあるあり。是れ豈に世を救はんが爲めに、世に下せる神の子たるの運命あら

んや。汝が父の世界の中、尤も劣等なる受造物に汝が力を加へ見よ。此處に此石に命じて「パン」とおせよ。此直ちに汝が命に從ひん。而して汝の饑を救ふべし。汝が身を此の高塔より投せよ。汝若し汝が自ら信ずる者たらば、汝が父ゐ其使をして汝を支へしめん。汝若し此等の休徴を實驗するを得ば。爰に初めて汝が自信の迷信あらざるを確認し。而して汝が將に着手せんとする其事業が。汝の同胞なる此憐むべき人民をして。悲哀と滅亡とに沈淪せしむるものあらざるを知らんと。

然り而して此の永き斷食も、衰弱も、彼れが心裡の疑惑も不信も不忍耐も將た又誘ふものが巧妙なる勸說も。未だ以て彼れが一片の父を信ずるの信念を動搖せしめず。毫も自負の所行を爲さしむるを得ざるを見るに至りてや。敵ゐ直ちに其攻擊の方面を一變したり。誘ふものゝ聲彼れに語つて曰く。

然り汝が思ふ所或ゐ是れ正しからん。汝ゐ自ら以て此の世界を救濟すべき神の子なりと主張するも。是決して自己を欺き空想を夢みたるにあらざるべし。思ふに是れ汝が本領にして事業たらん。只だ夫れ此に一考すべきものありて存す。汝ゐ今日に到るまで賤蔑せられたる遠隔の僻村に生長し。万民の人心を支配するの勢力と。築礎燦然たる此世界の王國を建築し。又之を維持するに足るの智識と經驗とを有せりと云ふべからず。此等の勢力と方法とゐ。人類が善惡を識別するに至りしより以來。汝が父の世界に在りて用ひられ來れる所たるなり。是れ決して難事にあらず。汝ゐ只だ之に適する言語を發し。其欲する所に隨ひ。思ふが儘に此等の勢力と方法とを利用するにあるのみ。此等の助けを利用してこそ。汝ゐ初めて汝の魂の苦厄する效果を見。以て心に安きを得ん。若し夫れ是れを利用せずんば。此處彼處に一二の人心を救ふの外。何等の偉業をも成就すると能ゐず。空しく父の國の來臨をして遲延せしめ。以て末代の悲慘と滅亡とを招くべきのみあらず。汝が利用せざりし其勢

力や偶々以て汝を壓倒して孤獨寂寞憐むべく打毀せられたる人間として此の一生を終へざるべからず若しも此等の方法にして全然神の聖旨に戻り其事業を成就するに於て全く不適當たるものたらんには神何ぞ今日まで此れを其世界に存在せしめて人をして之を用ゆるを許し玉はん世を救ふの道只此の一途あるのみ且つ夫れ汝が時の長きにあらず特に汝の多年の間寒村ナザレの小屋に在り潮流の淵に立ちて戰慄しつゝ此貴重なる年月の流れ去るを坐視し來れり今や汝の逡巡すべき時にあらざるあり汝が祖先の中最も賢明なりし人々も已に此等の方法を認め又之を利用して以て國威を擴張せり汝が之を拒絶するの理由なれ果して那邊にあるか

以上の基督が其己人的の生涯を去り公共的の生涯に遷らんとするに際し四十日の間彼の心中に系續せる試煉の狀況を最も概略に又不完全ながらも抽き出せるものたるに過ぎざるなり實にや四十日の間此の爭鬪の彼の心を充塞し百疑一掃斷然として自己の天職を確認し又之を承托するに至るまでに及べり此最大試練の終りに至りてや彼の天晴れ自己の天任に關するあらゆる疑惑を打ち碎き全然之を撲滅し盡せり又全く自負的行爲の勸誘と交の印を有せざる凡ての方法の助を以て其神の國を建設せんとするの誘導とを斷念し終へたり此凱旋の勢に乘じて彼れの直ちに其天職に着手せんと野を去つて市邑に歸れり而して他人の言によらず自己の衷心に神より直接に學び得たる方法によりて此世に神の王國を建設せんとするの覺悟を定めたり吾人基督の生涯に蹤跡して此点に達するに至り吾人の其品性の一大主要部を發見するを得たり是他なし忍耐是れなり確固不拔の精神を以て神の心を待つこと是なり此の神意を待つの忍耐や是れ實に人性の最高理想にして眞正丈夫腦の最重部分にあらずや試に基督が野の試みを見よ其中にの固より吾人の解し盡せざる多くの秘義ありと雖も只だ最も單純に有りの儘に此が談話

を承托し來り。而して此恐るべき危機に際し。基督は完全なる丈夫膽に於て。一点は弱点と欠点あるを發見し得るや否やを自問せよ。然り彼れが單獨危急は時機に當りても。吾人は爲に演現する此の完全無欠なる眞勇は摸範を習得し來れ。諸を寄す滿天下は青年諸君願くは勞を惜む勿れ。疑を壓殺する勿れ。只だ諸君各自は良心を明らかにして。直面目に此は談話を講究せよ。

苟も世界は歴史に於て重要なる關係を有せる、古來は英雄偉人にして。恰も能く基督は野は試に適合せる。危急は時機を有せざるもはいあらざるべし。只だ夫れ最も近く此れに類似せるは塲合は。世界は宗教を創立し、或は之を改革せる。所謂偉大なる宗教家の傳記に在りて存するを見る。此等の中最も偉大なりし彼モーゼを除きては。吾人が充分に辨論し得る所のものは、只一のマホメッドあるのみ。彼れが人物と其の建設せる宗教の性質に付きては。吾人は各異色の感想を抱くべしとは云へ。兎も角も彼れが稀有の勇氣を有せる人物たりしことは。誰しも疑を容れざるなり。然るに彼れが初めて其の事業を確認して。斷然之に從事するの決意を起したるは。即ち是れ彼れが沙漠の中に單獨永續の默考を終へたる後ち。彼れが目撃せる幻影の結果たりしなり。白銀の巻物は彼の眼前に展べられたり。之を保つ所のものの彼れに命じて其内に錄せる神の告示を讀ましめ。且つ曰く「汝は神の預言者にして我は其天使なり」と。彼れ此の幻影によりて周章戰慄。直ちに走つて其妻の許に至り。具さに其始末を告ぐ。而して妻が勇敢親愛なる忠告と。其の友人徒弟等が深切なる慰藉とは。辛くも彼れをして落膽と自殺とを免れしめたり。

余は尚ほ進んで此比較をなすの要あるを見ず。只此の一事を記して止まんのみ。曰く基督は毫も他人の補助に依ることなく。獨り能く酒搾を蹈み終へて。優然誘惑の濃霧を切り拔けたり。而して其時より以後、神の求め玉へる事業に對し、確固不動の決意を以て、豪然之に向て進めり。

今や余輩の爲めに殘る所のものゝ、彼れが事業的の行爲を研究して、其特別なる性質を評說するに在るのみ。爰に余輩ゝ再び諸君に向つて求めんと欲する所ゝ、始より終に至まで、此キリストの生涯が能く吾人の所謂最高なる試金石に耐へ得るや否やを考察せんが爲め、著々歩を進めて其生涯を研究する事是れなり。吾人が最初より考究の基礎と定めたる、眞正丈夫膽の一特性をして、寸時も吾人の念頭を離れしむること勿れ。遠慮することなく、制限を加ふることなく、自由に此の試金石を彼れが生涯に適用せよ。余ゝ腹藏なく明白に再び公言せんと欲す。何ぞや曰く、若し夫れ基督の生涯にして、其千種万態なる行爲の中、一点たりとも此の試金石に耐へざるの箇所あるを認むるの日や、正に是れ基督教の基礎破滅せられたる時なり。余輩ゝ世上の最も高貴にして剛勇なる人傑に對し、例へばモーゼの如きエリヤの如き聖ポーロの如きソクラテスの如きルーテルの如き若くゝ又マホメッドの如き、其他多くの偉大なる預言者等に對して、幾分か許容する所なくんばあらず。只夫れ完全なる人の子、即ち神の獨子なる基督に對してゝ、吾人ゝ寸毫も容赦することを得ざるなり。彼れの生涯や凡ての境遇を一貫し、凡ての時期に通じて、巍然として此の試金石に耐へ、終らずんばあらざるなり。若し夫れ然ると能ゝずとせんか。余輩の立ち塲ゝ足下より破壞し、吾人の基礎や顚覆し去り、神ゝ即ち人となつて自己を世上に顯出せず、基督教國が十九世紀間の年代中、確信し來りたる方法を以て、此世を救濟し玉ゝざりしなり。嗚呼夫れ眞に然りとする乎。

第五章。基督の事業。第一期(創業の時代)

This perfect man, by merit called my son,
To earn salvation for the sons of men.

Milton.

吾人が目的を達せんが爲めに、余ハ是より主イエスが傳道の事蹟をして、一條の連續せる談話の中に、包括する事を勉めんと欲す。勿論主が傳道の事跡の中にハ、能く之を考究する時ハ、無限の難問と疑惑とを、喚起すべきもの尠おしとせず。然れども余ハ一々此等の点に注意を惹かん事を欲せず。只だ大体上より主の生涯を觀察し、以て吾人の學ぶべき所を學ばんと欲するなり。但し是れ決して此等の議論を輕視するが故にあらず。又諸君が講究の念を挫かんとするにもあらざるなり。批評的時代とも稱すべき今日の時勢に於て、歴史學の發達ハ實に驚くべきものあると同時に、史學の中最も高尚なる部分を占むる宗教の學術も、亦從つて莫大なる進達をなせるを見る。即ち吾人ハ人世の百事百物に對し、之が攻究の方法に於て、日に月に嶄新完全なる方法を發見しつゝあるなり。而して此の新らしき批評的講究たる、曾に少數の學術上にのみ適用せらるゝに止まらず、更に進んで曾て吾人の祖先等が、神聖にして犯すべからずと斷念し來りたる、歴史上の記事の上に、否な之を記載する所の書籍の上にまで、其の鋭鋒を向くるに至れるハ、是れ實に余輩の喜とする所なり。吾人の邦家と世界の上に、絶大無比なる裨益を與へたる此れ書籍ハ上に、吾人ハ祖先等が、少なからざる敬虔ハ念を抱けるや、余輩ハ尤も尊崇する所なりと雖も、然れ共、又此れ批評的攻究が、大膽にも此れ城郭ハ中に進入し來り、敵も味方も諸共に、全力を注ひて探究の火花を散らしたるにより、主イエスキリストが傳道の行跡と其の此を記載する所の四福音書の記事の上に嶄新なる光明を漲らすに至れる事、是れ豈に今世紀文明の最大賜物にして、吾人の最も喜ぶべき所にあらずや。

想ふに吾人基督信徒は、或る点に於て、偶像崇拜の危険に陷りつゝありしなり。是れ他なし、其の之を顯さんが爲めの書籍聖經を以て、顯はさんとする人物基督其物と、同視するの弊害是れなり。吾人が生涯の中心に、不正確の觀念を釀成すべき、此の恐るべき弊習より、吾人を脫却せしむる爲めには、假令如何程劇烈ありしにもせよ、此の批評の潮流により、先づ其の根本を一洗し去らるゝ事、蓋し已を得ざるの致す所なり。吾人は基督の宗教と其の証據の爲めに、基督も亦其の弟子等も、未だ曾て主張せざりし所の事を主張し、未だ敢へざりし所の事を、敢へんと欲するの傾向に陷る事屢あり。然るに一度び批評的の攻究により其の根蔕を一掃し去りたるの後や、余が知る所を以て見れば、凡ての宗派の代表者たる、最も敬慶ある諸名士等も、今や全き自由を以て、之れが攻究に從事するのみならず、益々吾人後進の輩を、奬勵するものあるに似たり。然り而して此等の難問中最も大なるものは、一は、四福音書の復雜なる記事を總合して、之を連續せる一條の說話に、調和するの一点に在りて存す。

是れ實に絕大の難事にして、吾人が今後嶄新なる証據物を發見するにあらざる限りは、吾人が從來知り得たる所のみを以てすれば、到底完全に此れが總合を成就する事能はざるべし。否なる少なくとも今日迄は、之れが好成蹟を見る事能はざりき。然りと雖も、其の大体上の事柄たるや、已に判明確實にして、更に疑を容れざるものあつて存す。而して吾人が要する所は之を以て足れりとなす。

然らば則ち、吾人は是より着々歩を進めて、基督が生涯を研究するに當り、前章に於て吾人が達せる幼少の時代を去り、其の公共的生涯に遷らんとするに及び、直ちに吾人に面するの難問あり。他なし。彼が試誘を終へて野より歸るや、彼は直ちにガリラヤに戻り行きしや、或は又た一たびヨルダン河邊に歸りて「バプテスマ」のヨハネを訪ひ、此と共に數日を費やせしや否や。彼れは直ちに野を去つて、其の公共的の事業に着手せるか。或は又ヨ

ハヲが獄に投せらるゝ迄でゝ、此れが着手を猶豫せるや否や、是れ即ち劈頭第一の難問にして、未だ一定の議論ある能ゝざる所ありとす。

諸君ゝ宜しく四福音書の記する所を比較して、此の疑問を自己の判斷により解釋すべきあり。實に此等些少の不調和たる、余輩が講究の目的に對してゝ、何等の關係をも有せざるあり。如何とあれば、假令此等の如何なるに係ゝらず、主が生涯ゝ、明かに數個の明晰判然たる時期に分劃し得るゝ、誰れしも異議を唱へざる所あれば、此等の時期の第一期ゝ、主が誘惑の凱旋より、彼れが斷然其の家を棄てゝ吾人の弟子を撰擇し、以て生涯の伴侶とあし、而して始めて故郷ナザレに於ける、最初の一大劇論を以て、公然ガリラヤに其の傳道を開始せるに至るまで、とす。此の第一期ゝ、永くも僅々數ケ月、若くゝ數週間に亙れるに過ぎず。即ち踰越節の數日前より始まり、初夏の頃に終れるあり。而してヘロデアンチパスが「バプテスマ」のヨハヲを捕へて之を獄に投せるゝ、余が見る所によれば、恰かも此時に當れるが如し。兎に角く吾人ゝ簡單に此の時期を經過し去り、其の中の主要なる事跡を記述して、而して吾人が最初より念頭を離さゞりし、所謂人物の試金石を以て、再び又た此の所に適用を試みん事を欲するあり。

彼れ野の試煉を終へ、其のガリラヤの故郷に歸らんとするの途次、再びバサバラの地を過れり。時已に夥大の群衆ゝ「バプテスマ」のヨハヲの周圍に蝟集せり。而して其中の尤も熱心なる輩ゝ、恰かも彼の預言者の子等がエライジャに於けるが如く、メジナの友等がマホメッドに於けるが如くに、彼れの身圍に附從して之に師事せり。ヨハヲ此等の弟子の二人に向ひ、自己が証明を爲さんとする、眞正の神の子ゝ、即ち此のキリストありと指示するに及んで、二人ゝ直ちに往きて基督に從ひしが、數時間の後ち彼等ゝ、直ちに彼を以て救主メシヤと認識したり。此等の内の一人あるアンデレゝ、其の兄弟シモンペテロを基督に連れ來れり。而してペテロゝピリポを呼び來り、ピリポゝ其友ナタナエルを誘ひ來る。かくて五人の弟子と共に、

基督ハ即ちガリラヤの鄕里に向つて出發せり。

此等最初の弟子等ハ、皆ある所謂十二使徒の人々なるハ、疑を容れざるが如し。其名の明記せられたる、アンデレ、シモンペテロ及びピリポに至りてハ固より論なし。而してアンデレの友として其の名を詳にせざる一人ハ、ゼベダイの子ヨハネなりしならんとハ、大に信ずべき根據を有せり。而してナタナエルとハ、即ち使徒バルトロマイの事ならんとハ、其の名の常にピリポと並稱せらるゝ箇所多きに依りて、畧ぼ之の然るを推知するに足れり。ナタナエルハガリラヤのカナの人なりしが、其の何職を業とせるやを詳かにせず。他の四人に至りてハカペナウンの近村ベッサイダの住民にして、ガリラヤ湖上の漁夫たりし事明白なり。彼等ハ基督に從つてナタナエルの故邑なるカナに至り、婚姻の筵に列し、基督が最初の奇跡を目擊せり。此處より又彼に從ひてカペナウムに至れるが、其中の或者等ハ踰越の節に於て、エルサレムにまで彼に從ひ行けり。基督が宮殿の中より牛羊を賣る者を逐ひ出し、兌銀者の臺を覆せるハ即ち此時なり。

此の行爲や、忽ちにして全エルサレムの注目を惹き、而して大にサンヒドリムの著眼する所となりぬ。其の中の一人なる一パリサイ人、夜に入りて來り彼れを訪問せり。彼ハ人民にも貴族にも自己を任せざりき。節筵の終りに至り、彼れハ暫らく近傍なるユダヤの北部に留まりしが、其の名聲忽ちにして播まり、多くの人々來り從ふ。其弟子是に洗禮を施せり。尋いで彼ハ等しく其の弟子を從へてサマリヤの地方を過ぎ、同じくサマリヤと稱する都邑に於て說敎をなし、此處に數日を費せり。是より終にガリラヤに來りしが、其の弟子等ハ一時各其の家に歸り、以て各其の業に就けるが如きの觀ありしが、其間基督ハ幼少の時より、自己を知れる故鄕の朋黨間に、其の公然的傳道を始めたり。然るに如何せん、鄕黨の人々、彼れが說敎未だ半ならざるに、憤然嚇怒、彼を殺さんと謀る。是に於て彼れ此の故山を去りて、近村なるカナに至りしに、千人の長なるもの、其の子の大患を癒され

んが爲めにカペナウムより來りて彼を迎ふ。彼れ其の兒を癒し、此父に從ひてカペナウムに入りしが、是處に始めて「バプテスマ」のヨハネが入獄を聞けり。而して彼れが生涯の第二期は是時より始まる。

以上吾人が記述せる所の点に至るまで、試に彼れの生涯中、果して一瞬時間と雖も、勇氣を欠くの跡ありや否やを探究せよ。先づ吾人が一般に着目すべきは、其の行爲を一貫して、寸毫も動搖躊躇の跡なき事是れなり。逡巡躊躇の時期は已に去れり。一たび此の天職を確認し、其の使命を承諾する、や、安んぞ狐疑後ちを顧みんや。人類救濟の大任を自覺せしめられたる、古今の英雄豪傑も、其の責任の重且つ大なるを知得する毎に、再三再四、疑念に其の信念と勇氣との弱點に乘じて、彼等をして迷夢の中に彷徨せしめたる事、吾人の常に見る所なり。モーゼは彼れが危急の時代に當り、自らの代りに他人を撰び遣はされんことを歎願し、終に其の避くべからざるを知るに及んでや、失望の聲を擧げて叫んで曰く「何故に爾に我を遣はし玉ふ

かと、エライジヤに死を願りマホメットに其の鄕黨等が、彼を指して「看よ彼處に神と語れるアブグラの息子に行くよ」と、嘲笑する罵詈の下に、落胆と疑惑の中に、空しく數年を費やせり。實に是等の戰慄と疑惑とは、深く吾人の同情を喚起するものなり。彼等と吾人とを連結するに、普通人情なる一條の大綱あるを感せしむるものなり。然りと雖も、余輩思ふに完全なる眞勇即ち丈夫膽や、正に能く此等の疑念を鎭壓して、之を身外に現出せしめざるを得るなり。苟くも大革命の主動者たるもの、須らく自己の中に、悉く此等の疑惑を閉鎖するの大勇なかるべからず。而して閉鎖せられたる、此の疑惑の重荷たる、實に是れ彼等をして、苦慘に堪へざらしむる、唯一の根原たるべきなり。

吾人は是より更に一歩を進めて、主が此の時代の格段なる事蹟に關し、一々是れが講究を試みんと欲す。此等の行爲の多くに對しては、吾人は殊更に之に勇氣の有無を識別する事、頗る難きを覺ゆるなり。只だ夫れ吾人は、

熟々吾人各自の生涯を觀察するも、吾人日常の行爲、一として二者の一に歸せざるを得ず。曰く飽まで其直線に丈夫らしく行ふか。若くは多少の權謀を以て、丈夫らしからざるの行をなし行くかの岐路是れなり。若し夫れ此の點よりして觀察を下す時は、主が生涯の行爲、一として丈夫膽の有無を判斷せしむべき材料たらざるはなし。吾人は爰に告白せんと欲す。人若し、然るを然りとし、否なを否なとするの生涯を送ゐ得るか、是れ實に最大なる勇者たるなり。而して其事業の大小、成功の有無如何に關せざるなり。然り而して此の敢訓を遺し玉へる主が生涯は、正に能く吾人をして、如何にせば能く此の勇者たるを得るかに關し、尤も完全なる模範を得せしめたるなり。試に看よ、此の特性ゐ當時已に赫々として、直ちに彼れがナタナエルニコデモ及びサマリヤの婦に對する談話の中より其の光を發する事、猶ほ彼が晩年の言論に於けるが如きを。

[illegible]

此等の談話に入るに先だち、吾人ゐ少しく主が宮淨めの事に一考を廻らさんと欲す。是れ蓋し勇氣ゐ身体の敢爲を以て、証明せらるゝものなりとの考を抱く輩に取りて、尤も滿足を與ふるの事蹟たるなり。試に想へ、當時基督は徒弟を有する事、殆んど皆無に均しかりき。彼の三年の后ち、棕櫚の葉を以て彼れを歡迎せる、巨大の群集の如きゐ、當時影だゐもなかりしを記憶せよ。而して此時に於ける彼れの行爲ゐ暫く擱き、彼れか説明を求めらるゝに及んで、自ら其行爲を義なりと抗言せる、其の驚くべき敢勇の言語を考察せよ。彼ゐ實にレビの一人にもあらざるなり。賤しむべき僻村の一農民のみ、而して宮殿の中央に立ちて、自己か權威を主張せり。果して何等の剛勇ぞや。當時エルサレムは極惡非道の偶像を以て充溢せり。然れ共未だ宮殿其物の崇拜の如き甚だしき偶像崇拜ゐなし。猶太人ゐ恰かも其時に方り、後世の信徒等が、時ゐ或は目に見ゆる教會、若くは聖經を以て、崇拜の物体なりと迷信せる事ゐるが如くゐ、神の宮殿其物ゐ措くゐ、非常の重きを以てしたり。實に彼等は此物にして滅しなば、神も又共ゐ滅せざる

を得ざるなりとまでゐ思考せるなり。是を以て基督は即ち短刀直入、直ちゐ此の偶像崇拜の根底を洞見して、一擊の下に人民の妄信を打破して、日く「爾僧此の家を毀て、我三日ゐして之を建てん」と、蓋し是れ眞正の神の宮とは、目に見ゆる木石の宮殿にあらず、我が身体、否ゐ凡ての人類の身体ろ、是れ即ち神を容るゝの宮殿なりとの意を敎へたるなり。而して群衆は彼が言の眞意を悟らず、否な彼れの弟子すら、之を悟得する事能ざりき。只だ彼等ゑ少ゐくとも、左の一事を悟れるゐるべし。日く彼は此等の宏大無比ゐる宮殿ゐ關して、何等の崇信をも有するものゐあらず。反つて此の地方的國家的ゐる妄誕の假說より、人心を救ひ上げん事を企つるものゐりとの一事是れゐり。實にや彼れの救に與らざりしの徒は、滅亡の日來りて此の壯大ゐる宮殿も、悉く破壞せらるゝゐ至るまで、此の迷信を脫却する能はざりし事の悲しさよ。

然れども、此の基督の勇敢なる、行爲と言語とゐよりて、彼ゐ心を傾けたるの人少ゐからず。遙越の節ゐ上り來れる多くの人々、而かも當時の主宰社會ゐも、彼れを信ぜるもの起り來れり。其の中の一人ゐるニコデモゐ關し、余輩は以下ゐ記述する所ゐらんと欲す。

ニコデモは所謂サンヒドリム會議中、錚々たる有力の名士ゐして、全國民と共ゐ、彼のシイザルの上ゐ權勢を振ふべき、大王なる救世主が、來臨せん事を待ち望みたる、此の主宰社會の代議士たりしゐり。主宰等は已ゐ使者をヨハネゐ遣はして、彼れが此のガリラヤの一青年ゐ關する証明の言を聽けり。而して今や彼れエルサレムゐ在りて、多くの人々が承認せざるべからざるの、奇跡と善行とを行ひつゝゐるゐり。試に看よ、彼れは何の苦もゐく、宮殿を一掃し去れり。此れ實ゐ主宰社會の、敢て成し能はざる所ろにして、彼等自ら無上の尊敬を宮殿の上ゐ表しゐがら、此れをして貪慾と妊商の巢窟たらしむるを、坐視せざるを得ざりし所ゐあらずや。彼等は已ゐ多くの人民が、彼れゐ從ひ事へんとするに、彼は之ゐ乘じて、自らを彼等ゐ

任せざるの行爲を目擊せり。果して然らば、彼は決して、野卑劇烈なる人民黨の主領者一流なるならざるなりと、是れ實に主宰中の最良なる、彼れの念頭に起りたる感想なりたるならざるか。兎も角もニコデモは慥かに此人こそ、實に「バプテスマ」のヨハネが宣告せる如くに來らんとする大王其人たるにあらざるかとの、疑惑おきを得ざりしなり。此の疑惑終に解かざるべからず、彼れ自ら往きて此人を見んと欲す。

斯くて彼は基督に來りて、親しく此れに聽けり。曰く我は王國を建てんが爲めに世に來れり。然れども是れシイザルの王國の如きにあらず。人の靈魂上に打ち建つべき、目に見へざる王國にして、人苟くも此の王國に入らんと欲せば、主宰によらず、農民によらず、悉く皆な生れ更りて、新らしき人とならざるべからず。曰く「眞の光は世に來れり」而して「眞理を行ふものは此の光に來る」と。

主が談話の初めより、終りに至るまで、此のニコデモの心を收攬し、以て彼れが代表する主宰社會の歡心を得んと欲するが如き、一言半句の語調だになきに注意せよ。彼れ若し成さんと欲し玉ふか、ニコデモが確執せる、許容すべき宗教上の迷信を捕へて、巧に之を自己の說話に調合し、或い言語を婉曲にし、或い意見を折衷し、以て只に此の善良なる一人の主宰の心を歡ばしむるのみならず、其代表せる有力なる團體と講和結托して、能く之を利用し得るに至ることを、實に容易れ事たりしならん。而して見よ、彼れにい毫も其跡なし。吾人い有力なる人々に接する時、然り其の能く吾人が抱負する所の事業を成就するに於て、莫大の助力を與ふべき人士に接する時程、實に烈しく吾人の品質を試みらるゝ事あらざるを知るなり。是れ多くの人の終に躓く所たるにあらずや。

是の夜間の訪問に於て彼れが聽ける奇異なる言語い、深くニコデモの心裡に浸入して、莫大なる感化を與へたる事い、吾人後に至りて明らかに錄せられたるを見る。然れども如何せん、彼れの勇氣い此時に挫折せり。彼れ

怪しみ恐れ、而して退き去り、此の奇怪にして解し難き青年農夫をして、獨り其の途に往かしめたり、惜哉。

此と同一なる率直と鋭刻とを、サマリヤの婦人に對する、彼れが敵闘をも一貫せり。此處に彼れ直ちに再び尤も好愛せられたる、地方的の傳説を打破し去り、禮拜の眞否を、其の場所の如何によらず、其の物体の如何によることを斷定せり。其の物体や、凡ての人の靈性上の父にして、萬民の己れを知り、之を禮拜する事を求め玉ふと雖も、靈と眞理とを以てするにあらざれば、之を禮拜するを得ざるものなり。今汝と談話しつゝある、此の一農夫なる、我れ自らが、是れ實に救主メシヤにして、汝等の父なる神の命により、汝等の心の中に眞理の靈を與へんとて、世に降れる神の子なりと。

彼のエルサレムに於ける猶太人を、主が敵をなすの權利ある事を、証明するに足るの奇跡を求めて、彼れの周圍に叫呼せるに、數日の后ち彼等が此の奇跡を見るに至りても、今や反つて其の血を啜らんとて咆哮せり。之に反してサマリヤ人を、かゝる要求をなさゝりしのみならず、能く彼れが説教を聽き、又其の使命を認識せり。種子既に地に撒かれたり、而して彼を收獲を他人に遣して、平然此地を立ち去りぬ。而して終に再び此地を蹈まざりき。彼れを反つて、頑固なる宰司等の根據たる、ガリラヤ湖邊の石地を擇びて、其の傳道の中心とはなしぬ。如何に此の撰擇に關する解釋を下すに係らず、是れ決して軟骨怯懦なる、改革者の決心にあらざるを見る。試に此の基督が最初の戰場の撰擇を以て、之を他の大業の主動者たる、あらゆる大人豪傑の行跡と比較し見よ、思半ばに過ぐるものあらん。

主が傳道の第一期を、ナザレに於ける事蹟を以て、終りとなすを適切とす彼れ其の故山に歸るや、エルサレムの節筵に於ける、彼れが行爲に關する風聞を、已に其の家族と朋黨の間に達し、村人を皆な熱心に之を評判して、或者を此の俳村、此の偉人を產せるを驕り、或者を彼れの大胆、終に禍を全村に引かん事を恐れ、恰然二箇の黨派を分つに至れり。彼れが幼時より住

み馴れたる故郷に於て、其の好愛せる郷人等と、親和せる團圓の中に、安全なる生活をなさんが爲め、又た其の宣傳すべき福音をして、兎も角くも此等故山の人々に適合して、彼等の救とならしめんが爲め、而かも當時、人心激昂の時期に際し、其の言語を柔和にし、其の行爲を穩便ならしめんと欲するの誘惑、時々刻々、彼れが身に迫りしなるべし。特に彼れの家族の中、母マリヤはいざ知らず、悉く皆お太く駭き且つ怒り、禍を一家の上お及ぼさんとを、怖れ居りし事明らかおり。彼等は彼れのエルサレムお在り、若くは其歸路お當りて、現はせる言行の風評を聞き、大お是れを嫌惡せり。是れ啻お彼れ一身を危ふするのみおらず、實お引ひて其の一家の運命を傾くるに至れべなり。彼れナザレの會堂お立ちて、教をおすの前お方り、想ふお必ずや、先づ其の家族と語る所おりしおるべく、而して彼れが宜しく愛慕ずべく尊敬すべき、此の骨肉の人々等と其の見る所、信ぜる所を異お するの故を以て、涙を飲んで、彼等の意お反き、其の愛を割き情を絶たざるを得ざるの悲慘をば忍ばざるを得ざりしおり。

余は今茲に再び繰り返して曰はんと欲す。吾人が良心お、是れ眞理おりと確信す所お、よりて立ち、毀譽褒貶、安危存亡を顧みず、吾人が愛慕し尊敬し、成るべくい其の欲する所に從ひ、其の判斷する所を行はんと欲する所の人々の、あらゆる反對に抗抵して、其の愛と同情と尊敬とより、自己を切り放ち去らん事、是れ實お吾人が遭遇し得べき、尤も劇烈おる試煉の一たるおり。人かゝる境遇お立つお當りてや、必ずや自ら神の聖靈が、自己の上お臨めるを感識し、此の聖靈の力お よりて、能く此の大試煉お耐へぞんべからざるおり。余輩基督がナザレの會堂お立ちて、尤も直接お救主の事を說明せる、イザヤ書の數節を撰びつゝ、自ら此の錄されたる事は、悉く我れお就きて錄されたるおりと主張して、今日此の預言は汝等の前お成就せりと、宣言せる時お際し、同じく彼は神の聖靈を以て、充されたるの跡おるを見ずんべおざるなり。

是ゐ於てか、劇烈頑執ある猶太人心は、直ちに激昂憤懣せり。彼等は直ちに其場ゐ於て彼を殺し、其の主張せる所を否定せんと欲す。彼れ是ゐ於て彼等の間を遁れ、其の幼時より、生長せる、靜閑なる家鄉を出て、只獨り、友なく家なく飄然として、茫野の中ゐ彷徨し去りぬ。人の目ゐは彼れ實ゐ單獨なりしならん、然れども實は單獨ならず。彼れの父常ゐ彼と共ゐ居れば空の鳥は巣あり、野の狐は穴あり、されど人の子は枕する所なし。彼れは實ゐ家なき人ゐ似たり。然れども實は家なきにあらざるなり。人の安んぜべき唯一の家は、彼れ自らの心中ゐ存在せり。此家に彼は神の聖靈と共ゐ住まへり。

第六章。基督の事業。第二期(凱旋の時代)。

汝何を見んとて、出で來りしや。

小舟の上より道を敎ゆる一青年。　エ、クロウ

主が傳道の第二期ゐ、主として喜べしき進歩と、凱旋とを以て成れり。而して、眞正丈夫膽の試誘たる、四面暗澹、困難百出の逆境よりも、寧ろ此の順境の時に於て、一層巧妙ある法策を以て、吾人を襲ひ來るものあり。謂ふにかゝる時の心裡の戰爭ゐ、自己の心中に、新らしき希望と勢力とを自覺するによりて、異常の熱心を喚起すると共に、其の之を彼の心中に起さしめたる人々に對して、限りなき感恩の念を燃やすに當り、自己の主義と立脚の地とを變更する事なく、而かも此等の人々を誤らしめず、不正確ある感想を、抱かざらしめんが爲めに、嚴肅周到ある警戒を以て、自ら省み、自ら愼しむの点に於て存するなり。

嗚呼此時あるかな、誘惑てふ一種の惡魔が、凡ての人の上に、其の全能力を

逞ふするの時や、實に此時あり。自己が神の臺前より受け來りたる靈火に感じて、奮興したる普通人民の群衆の上に、自己の根據を定めんが爲めに、卑怯にも從來の主義と生涯とを一變し、彼等の以て標準とする所の点にまで、低下せしめ、以て彼等の輿望に適合せしめんとするゝ、是れ世の所謂最も偉大なる改革者の生涯に於て、吾人の屢々發見する所たるなり。假令ゝ彼のサボナロラの如き、若くゝ彼のウエスレイの如きすら、吾人が尤も忠實に、彼等に對する滿腔の好愛を以て、周到に其の生涯を講究するに方り、吾人ゝ實に悲哀の念を以て、此等の点の實在するを認めざるを得ざるあり。更に又、以上二人の人傑よりも、遙かに超越せる大人物、マホメットの生涯に在りても、吾人ゝ此の悲むべき現象に關し、尤も適切なる例証を發見するあり。

「マホメット及マホメット教」なる貴重すべき書籍の著者なるボスウオルス、スミスの言ふ所によれば、マホメットが凡ての反對者を一掃し去り、新らしき宗教の豫言者とし、警醒懺悔せる人民の主動者として、彼のメヂナより歸り來るや、彼ゝ忽ちにして其の生涯と教理に於て、著るしき標準の低落を演出せり。傳記者之れが解を下して曰く、「權力ゝ之と共に、新らしき誘惑と、新らしき失敗とを伴ひ來るものあり」と。實に人ゝ其の天職に關して、神の感化を受くること益多く、其事業と其主義との、公明正大なるを確認すること、益明晰なるや、其の此れか目的を達するに至るの方法如何を輕視して、其事業の成功と勝利とを以て、其の方法の善惡を判斷せしめんとするの誘惑に陷いると、又益大なるものあり。彼れ今日其の使命の實蹟によりて、已に夥大なる從者を其の身圍に吸集せり。彼れ謂へらく、我ゝ如何なる方法を以てするも、是非共彼等の上に、其權力を維持せざるべからずと。是に於てか、其の行爲の目的たるや、自己の良心の最高なる志望を成就せんよりゝ、寧ろ此の從者を離さゞらんことに重を措き、日夜汲々、只だ其位地を去らざらんことを勉むるに至るあり。

余輩は以上の理由により、悲哀と謙讓とを以て、彼等の境遇を憫察し、其の過失を許容する所あらんと欲す。只だ夫れ基督の生涯に至つてや、吾人は又之を研究すること益細密なるや、其の終に一點の弱點なきに感ずること又益切ならざるを得ざるなり。吾人は實に彼れが生涯中、所謂法便を利用して、目的の爲めに方法を輕んずるの跡、秋毫の未だに之あるを見ざるなり。彼れは一瞬時も其の最高の標準より、其の生涯と教理とを低落せしめたるとなし、富めるもの、力あるもの〻救はるべき道をして、平夷ならしめんが爲めに、若くは彼れが教により自己の心中、朦朧として其の靈性の實狀を感得し、驚怖と不安とを以て充されたる、彼の憐むべき平民の從者等を進めんが爲めに、一毛の末だにも、其の最初よりの標準を低落し、或は之を弛めたる跡あるなし。然らば則ち、吾人は知る。此の不屈の眞實こそ、實に、これ凱旋的進歩と成功との時代なる、此時期に於て、吾人が主として探究すべき所なるを。吾人は是より斷次に主が行爲と言論とを講究して、果して此の最高なる理想と背戻する所あるや否やを看見せんと欲するなり。

此時代は何時より初まり何時までに系續せるやを、明確に區劃すること頗る難し。然れども余が見る所によれば、之れ彼れが千夫は長は兒を癒し、カペナウムに歸りてヨハネは入獄を聞ける時より始まり、生命は「パン」に關する教により、一朝其は多くは從者を失なひ、而して此に尋ひで、宰司は主、學者パリサイは人等と、最終は破裂を來すに至つて終れるが如し。此は時まで彼等主宰社會は、猜疑と注意とを以て、批評的攻擊をなし居れるに、今や全く其方針を一變して、公然之れに敵抗し、始は程は暫しは間躊躇せるも、終には彼れが至る處に追跡して、其血を啜らんと狂奔するに至れり。實に彼れが此等は學者パリサイは人等に對するは關係こそ、正に是れ格段に、吾人は注意を求むるもはなし。如何となれば、吾人が若しも、主は志氣と患實とは失敗、即ち眞正丈夫膽は欠点を、發見するとありとすれば、此は

点を指ひて、他に之れあるべきを知らざれば なり。

吾人は四福音中より、此時代は連續せる光景を集合せざるべからず。而して馬太傳第四章は繫りに當り、其初めに關し、最も明白に記載せられたるを見る。時に暫時は間各其家に歸りて、ペッサイダに漁業を營み居れる、ペトロ、アンデレ及ゼベダイの子等を、再び其は傍ふ呼び寄し。而して公然山上の教訓によりて、湖岸市邑に其傳道を開始せり。而して此の時期は終りに關しては、路加傳第十一章に就て見るべし。即ち彼れが言論は、大に學者パリサイの人々を激昂せしめ、殆んど狂亂せる者は如くに、烈しき難問を以て多くの答辨を強ひ、其の語の過ちを捕へて、之を訴へ種とおし、以て彼れを罪ふ陷れんと、其の隙を窺ふに至れり。

最初は然ちは、吾人は目的に必要なる、主要なる事實を摘採せんに、先づ吾人は、主がバプテスマのヨハネの入獄を聞くと同時に、之を以て自己に對する、最后の召喚なりと覺悟せるを見る。是に於て彼れはヨハネの弟子中の二三を其許に呼び集め、野に呼べる聲によつて、己に奮興したる、不安熱中の群集を歡迎しつゝ、彼れは直ちに將に世に建てらるべき神の國を宣傳し、其性質を說明せんと進み立てり。大空は下、獨り小山は傍に立ち上りつゝ、此れガリラヤの青年農夫は、滔々として此の絕大なる宣告を說き出せり。此の宣告や、實ふ容易にも、人類をして此の新たふして、高き位地にまで進達せしめ、爾來今日に至るまで、たとひ幾多の改革者が無限の苦痛を以て、之れが墮落を防がんが爲めに、必死の奮鬪を要せりと云へども、然れども大体の上に於て、一度彼れの依つて上げられたる此位地に於て、其の根蔕を強固にし、以て遲々たりとも、最後は成功に向つて、益進達するの力を與へたるなり。

全世界の歷史中、何れの處にか此と比すべきの事あらんや。是れ實にキリストが治病的奇跡よりも、一層驚くべく怪しむべき一大奇跡にして、彼れが神の子救世主たるを証する最大の休徵にあらずや。不信の徒は之を嘲

笑し、之を罵詈し、基督信徒なる博學の士い、爾來今日に至るまで、全心全力を注ひで之れを講究し、說明せんとを務めたり。然れども此の地上に在りて、神が吾人人類に求め賜ふ所い如何、吾人が達すべきの点い如何との、至大なる問題に對し、彼れが口より平然として、流れ出でたる此の宣告と証明とい、實に万世に亙りて、益新たに且つ有力なるを見るにあらずや。

吾人が今此處に主眼となしつゝある、主が勇敢れ言論に關してや、余い只、今一度び聖書中にある、此等の記事を再讀せられんとを、讀者に向つて勸告せんと欲するなり。而して此を爲すに當り、常に吾人の念頭に置くべき事柄あり。何ぞや他なし、先づ此の說敎者なる彼れい果して誰ぞ。曰く純然たる一箇の農夫にして、而かも已に其れ隣人鄕黨の間に見捨てられ、國民れ主宰と敎師等に、猜疑せられたるものなり。次に其聽衆たる人々い果して、誰ぞ。曰く猶太の農民漁夫を始とし、羅馬の營卒もあり、ダマスコ、ダイラ、シドン其他希臘の遠島より、集り來れる商賈もあり、加ふるに收稅吏、學者パリサイの人、及律法家の巨群を以てしたる、混合雜多れ群衆たりしなり。

吾人若し此の二事を常に念頭に離さずして、而して主が當時れ言論を誦讀し來らば、思半ばに過ぐるものあらんとす。

山上の說敎れ直接なる結果や、一時い能く聽衆をして心服せしめ、隨意に其群集の中より、己が欲する丈けの弟子を撰拔するを得せしめたり。彼い漁夫と農民の中より、其弟子を撰べり。此最下等の階級外よりい、僅かに二人を撰べるのみ。而かも其中の一人や、最も貧賤なる農夫よりも、遙かに猶太人の嫌惡賤蔑したる一階級、即ち收稅吏の中より撰べり。彼れ若し之れを望むあ於てや、最初より上等社會の階級中より、其の使徒を撰拔すると容易なりしならん。若し其の勇氣に一點の欠點ありしあらんには、慥かに此擧に出でたるあるべし。然るに殊勝にも、自ら其弟子たらんとを請へる一人の學者は、彼れによりて拒絕せられたり。

使徒の撰任に尋ひで、主の爲し玉へる多くの敎へと奇跡とは、次第に人民

の心を感動し來り、終に彼の五千人に食を與ふるに至りてや、人民の熱心や殆んど其の極點に達し、曾て此の奇怪なる國民の、主動者と預言者に對して抱けるが如き、非常れ熱心を燃上らしめぬ。彼等は將に腕力ゐよりて彼れを捕へ、之を其れ王に戴かんとす。

使徒は喜んで此れ熱心を煽動しぬ。爲めゐ基督は彼等を强ひて、舟ゐ乘らしめ、自らに先ち湖水れ彼方に行かしめたり。自ら彼等れ許に至り、其れ理會鈍く、信仰れ薄きを譴責し玉ふれ后ち、彼は再び群衆ゐ戻り來り、自ら我ハ天より降れる「パン」なりとれ敎を爲すゐ至りて、此れ言や端なくも、多くれ弟子等を憤怒せしめ、彼を離れて共に歩まざるゐ至らしめたり。凱旋的進歩れ短時期ハ、今や其終りに近づきぬ。彼れと其弟子等が、播きたる種子れ收獲を刈り入れつゝ、莞爾として其成功を喜びたる幸福れ時期、今や去つて再び來らず。

然りと雖も人民等ハ、皆其れ新宗敎を得たる初期れ熱心を以て、彼れが周圍に群集せる、此れ成功れ好時朝ゐ於てすら、實ゐ一方にハ、主宰等が必至ある反對を爲しつゝある、恐るべき徵候を實見せしなり。此れ反對れ極點や、實にガルバリ山上れ悲劇とは爲り終りぬ。余輩は實に此れ時期ゐ於ける基督が、此等主宰等に對する關係を一考し見んとを欲するなり。

此れ反對は決して一朝一夕ゐ生せるもれゐ非ずして、漸次ゐ其れ度を高めたるなり。初めれ程は學者パリサイれ人等が、イエスに從ひ纏ひたる所以れも、決して直接なる反對れ精神を以てゐあらざ。寧ろ其れ敎へれ如何を聞き、其れ行爲れ如何を注意せんが爲めゐてありき。彼れ山上れ說敎を見るに、基督か直接に彼等ゐ關して語れる事は、只だ一回ゐるれみ。即ち彼れが其建設せんとする、王國れ律法を說くゐ當り、此れ王國ゐ入らんとするもれは、學者とパリサイれ人々よりも、其義しきと優らずんばある可らざるを聽けり。此れ言に依りて、彼等は直ちに彼と分離せるやと云ふゐ、決して其れ然らざるが如し。如何となれば吾人は其后、直ちゐエルサレム

及びガリラヤユダヤ其邑々より、學者とパリサイ人等が出で來りて、彼れが說教し傍らゐ坐し。又所謂「人々を癒さんが爲に、主の力の顯れたる時も」、靜かに其れ行爲を目擊し居たるを見れば、然るに今基督が、彼れ中風に罹れる人に對ひ、「汝の罪の許されたり」と曰ふを聞くに及んでや、彼等の奮然として激昂したり。然れども其れ人を癒さるゝを見るに及んでや、彼等默然として言語なく、恐れ戰き、神を崇めて曰く「我等今日奇しき事を見たり」と。

然るに又た間もなく、彼等の猜忌心を再發せしめたるもの、ころあれ。是れ他なし。基督が彼等主宰社會の階級中より、一人の弟子をも撰ばざりしに、一事是れなり。想ふに彼等は之を以て、擅橫の行爲と斷定せるなり。彼れ等がキリストの傍に在り、其の說教を聽くの時に當つてや、彼等必ずや謂へらく、余輩が此處に着席するの、此の靑年說教者の爲めにの、莫大なる恩寵たるなり。如何となれば、是れ大に彼れが行爲の批準となり、又其の尊嚴を添ゆればなりと。斯くて彼等の、早晩彼をも彼の弟子等をも、又彼に聽ける人々等をも、彼等の恩誼を感得するに至るならんと思念せり。同時に又、彼等が常に主の傍に在るによりて、彼も其弟子も、將た又多くの人民等も、過劇なる言論と行爲とを爲すことをせず、然り而して或のそれ、後來イスラエルの國益とならざるを保せざる、此の新らしき國家的運動をして、空しく中途に破壞し去られ悲劇を演出せしめざるに於て、彼等の絕大なる利益を、彼等に與ふるものなりと自信せり。

然るに今此等の夫子先生等が、かく自らの行爲を評論し、多くは其れ自己が寬大を自稱しつゝあるの時に當り、キリストの收稅吏なるレビを撰拔して、其れ使徒となし、而して直ちに其家に至り、多くの他の收稅吏と、飲食の宴に就きぬ。夫子先生、是に所て嚇として怒り、熱中之れが論難を始めたり。主が此の行爲の、正しく是れ、正統的預言者の行爲に關する、彼等の觀念に背戾せり。彼等豈に默するを得んや。基督の只だ簡單に彼等に答へて曰

く、「我が來るは正義の人を爲めにあらず、罪ある人を導きて、悔改めしめんが爲めなり、健なるものゝ醫者は助を求めず、只だ疾病あるもゝのみ之れを求む」と。

此後數日にして今一層嚴格なる問題は、彼等は間に起り來れり。安息日に、主の弟子等ゝ、麥の穗を摘みて之れを食ひしに、基督之れを可とせり。次は安息日には、彼等が例の如く注目する面前に於て、或る病人を癒せり。而かも彼等を試みんが爲めに、特更に之れを此日に行ひ玉ひぬ。而して自らゝ人は罪を赦すは權を與へられたるものなれば、人の子は安息日おも主たるなり、と主張したり。是に於て、彼等ゝ斷然狂氣となりて猛り廻り、而して彼れを如何にすべきやと協議せり。

然りと雖ども是れ未だ最后の破裂にはあらざりき。彼等ゝ全く此青年說敎者を利用して、彼等の目的を成就せんとするの希望を捨てざりき。是にて彼等の中の一人なるシモンゝ、基督を招きて其家に伴ひ行けり。彼れが

一人の農夫たるの故を以て、賓客に對する普通の敬禮を欠きたるにしても、其の彼れを招きたるの心情に至つてゝ、毫も叛逆の念あるにあらざりき。思ふに彼れゝ、自らが毫も階級の如何に拘泥せざるの、大量を自負せるなるべく、而してかゝる非常的の謙讓こそ、或ゝ幸にして、此の青年の心を喜ばしめ、其れ將來れ方向に關し、社會れ上流に牛耳を取れる、自己れ輩れ意見を問ひ、或ゝ又た之れに依賴するれ念を起さしめんかと、想像せるおるべし。一人れ罪人なる婦女、其れ室に入り來り、膏油を以てキリストれ足を濡はし、毛髮を以て之を拭へり。基督ゝ直ちに此機を捕へて高貴ある敎をなし、又巧妙なる調子と、愛すべき性情を以て、而かも其れ中に嚴肅なる確信を包含せしめ、シモンれ心中に、着々として自己が其れ客を待するれ、道を盡さゞりしれ無禮と、人れ眞價を洞察するれ明なきとを、悟得せしめたる所れ跡、歷然として此れ談話れ中に現ゝる。蓋し是れ彼れが國家れ執權者、有力家に對する、處世れ方法れ最も好き例証たるおり。彼れ此家を去

るに際し、今一度び、自己が人れ罪を救すれ權威あるを主張したり。曰く「爾れ罪赦さる、爾れ信汝を救へり、安然にして往け」と。

余輩い今基督に從ひて、節(いはい)筵れ一にエルサレムに上り行かん。基督い此時事者とパリサイ人れ主城とも稱すべき、宮殿れ近傍に在りて、大膳にも是迄で地方れ祭司社會れ人心に、激動せしめたる問題を再燃せしめぬ。彼れベゼスダれ地に於て、病者を安息日に癒し、其床を取り、負ひて家に歸らしむ。

サンヒドリムれ前に呼び出されて、其れ説明を求めらるゝや。彼い今是れ迄におき明確なる言語を以て、神い自られ父おる事、而して啻に大業を此世に成すれ能力を與へたるれみおらず、「審判をおすれ權威」をも、彼れに與へ玉へる事、而して彼等が信奉する聖經い、生命を彼等に與ふるれ力おる救主として、自己を証明しつゝおるおりとれ宣言を爲したり。宜なるかな是に於てサンヒドリムれ團体も今い斷然基督を殺さんと謀るに至るや。

彼れ漸くにして彼等れ手を遁れ、ガリラヤに戻り來りぬ。而して余輩が先きに主れ傳道第二期れ終りとして、一言せる出來事い、是より始まる。

今やパリサイれ人等い至る所に基督れ跡を追ひ纏へり。然れども今猶ほ彼等れ心中にい、如何にしても自己が有する能いざりし、一種れ權勢を人民れ上に振ひつゝおる、此れ一人れ青年をば、利用せんが爲めに、何時か一度び、講和れ機會を得るに至らんとれ、一條れ希望を斷念すると能いざりき。當時れ説教中、基督い常に人民れ主宰と、教師等とを責むると尤も甚だしく、最大れ罪い實に彼等れ頭上に在りと、痛論すること常おりしに、此時にい毫も彼等れ罪を鳴らすとおく、只だ「アヽ禍おる世おる哉」とて、一般人民を譴責せるとれおりしを以て、多くい此等れ説教およりて、心强き思ひをやなしたりけん、彼等い再び其れ集會れ中に、彼れを招待したり。食する前に、手を洗ふ事をせざりしを以て、パリサイれ人之を怪しむ。是に於て彼等い兼てよりれ驚駭を表白し、基督い即ち烈火れ如き熱情を以て、侃々と

して彼等は僞善と壓制とを譴責し、「嗚呼禍あるかな汝等パリサイ人よ、禍あるかな敎法師よ、汝曹内に貪慾と惡とを充てり」と痛言せり。是れ予是れ、人は子イエスキリストと、イスラエルは主宰等とは間に於ける、最終最后、又た修繕し能はざるまで破裂とはなりぬ。是れ時より以后、キリストは次第々々に只だ獨り「酒槽を踐む」の境遇となり、攪亂せられたる群衆に取り卷かれ、如何なる不正の法方によりてありとも、必ず彼れを殺さんとを決意せる、有力なる仇敵の間に立てり。

第七章。基督の事業。第三期(孤城落日)。

神の爲めにと身を捨てし、彼の殉敎者等が燒かれたる、
火刑の焰の光にて、我足照し導きぬ。
我十字架を背に負ひて、新カルバリーの山坂に、
血しほに去たる〻基督の、御足に從ひ進み行かん。

ローウエル

今や吾人は危急存亡の大時機に達せり。即ち世界の大演劇、第三幕目の光景を見んとするなり。

神の國の急激なる勝利は、今や凡ての機會を失ひて、ガリラヤ湖岸、孤城落日の悲劇を演せり。此地や實に基督が當初より、自己の戰場として撰べる所ろ、最も偉大なる事業も此處に行はれ、最も偉大なる言論も此處に發せられたり。加之此地や實に、其の撰拔せる門弟等の鄕里にして、而して狂奔せる群衆等が、彼れを戴いて王とおさんと欲せるの所なりき。而して今や

彼れが成功は望みも亦、此地に於て絶へおんとす。想ふに當時、彼れも亦之を自覺せり。朝夕を期せざる一命を有てる、エゲは失敗せる主導者たりと感念、時々刻々に其心に透徹せり。初め彼れが此は戰場に進入するに當り、靜かに野に退ひて沈思默考する所あり。世界は權勢と策略よりも、一指も助力を受けざりしと、斷然堅く決意する所あり。然り而して此は世界は權勢や、今や、反かで彼れを壓倒し去らんとす。

猶太國民は主宰社會、即ち彼はパリサイ人、サドカイ人、ヘロデ黨、學者、敎法師等に、一致團結ガリラヤユダヤ。全野を擧げて、一隊は强固なる軍隊となじね。

硬骨にして深く愛國の精神に富むと雖ども、多くの純然たる農夫たるを以て、洞見と自制の力に乏しき、彼れ弟子等は、今や次第に彼を離れて去り行きぬ。是れ彼れの一方に於ては、彼等は望む所に反き、シオンの山に叛して愛國的の義兵を擧ぐるとを禁ぜるのみならず、屢々彼等が理解し得ざりき高遠の言語を以て、奇異なる稱號を自唱しつゝ、彼等をして歸來する所を知らざらしめたれば、あり。彼等は永く羅馬の壓制に苦吟せり、故に彼等を糾合して、此れ暴君に叛旗を翻へし、重鎖を免除せしめんとする、一人の主導者を待ち受けたるや久し。若しかゝる主導者たらば、彼等は飽までも一死を願りみずして從ひ事へん。然りと雖ども、キリスト此種の主導者にあらず。人類の生命の爲めに、其の肉を裂き、其の血を流すの事によりて、其天職を全ふせんとなせる「人の子」なりき。彼等此の「人の子」を如何せんや。猶太國民をして、世界万民の上に權勢を振いしめんよりも、寧ろ人類の靈魂を救拯し、人類をして神の右の手に進達せしめんと主唱せる「神の子」たりき。彼等此の「神の子」を如何せんや。

かゝる境遇の時に際し、カペナウム若くは其の近傍の村邑に留まるの事たる、即ち是れ即時の死を迎ふるに異あらざるなり。夫れ眞正の勇者は一死を怖れて、其の進路を變更するものにあらず。是れ實に眞正勇氣の一大

特性[illegible]して、又其れ試金石たることを忘るべからず。實にや此時、基督も亦瞬時も其れ路を轉せざりき。[illegible]

基督が當初れ思想い果して如何ありしにもせよ、此時に至つてい、彼れが心中只此れ一事れ存せるあるれみ。一事とい他なし、人類れ救贖い、彼れ自かられ完全絶對なる犧牲と謙讓とを措きて、他に一道れ存するあきとれ一事是れなり。此れ杯や終に粹糟まで飲まざるべからず、然れども是れ此れ虚にあすべきにあらず。是れ時にあすべきにあらざるあり。國民交戰れ中心羅馬政權れ根據たる主府エルサレムてろ、實に是れ此れ大業を成就すべきれ地なり。犧牲救濟れ國民的記念日なる逾越節日てろ、實に此れ偉業を果すべきれ時なり。是に於てか、彼れ數人れ門弟を伴なひ、朝夕間斷なく其れ身圍に切迫せんとする戰陣れ劇潮を避けて、窃かに其れ跡を晦ましたり。此時より彼い僅か二回を除きてい、常に人民の中心點たる都會の地を避けて、公然其の身を現はさざりき。二回とい即ち殿堂の修厦の節

節にして、此時各、彼れが形い一日の間、電光の如くエルサレムに現はれたるも直ちに其の跡を絶ち、違法者の避け場なきらずんば、野獸の巣窟たる原野の中に退き去れり。主が生涯の此の部分い、僅か一年の間に亙り、彼れが傳道第二年の夏より始まり、第三年の終りの踰越の節に及べり。吾人此の逾越の時を稱して「イースター」の祭日とあす。

此れ時代の主要ある事跡を一瞥し來る時い、余輩が第一に注目すべきい、主として基督と其の十二使徒とれ談話にして、今や自己れ生涯を終へ、彼等れ生涯を始むるに當り、彼等を準備修養せるれ事跡是なり。又彼れが其頃れ二大節節に、エルサレムに於て爲し玉へる行跡と、此時再び彼れと主宰パリサイれ人等れ間に生せる、大衝突の狀況とい、吾人れ當に着目すべきの事たるべし。

特に當時れ生涯を一貫して、最も余輩を慨歎せしむる所れもれい、彼れい多く成すべきの事業と、語るべきの教訓とを有するに、如何せん、此等の事

業と教訓とを受くべきの人民、否な彼れが自ら撰びて、特更に此等の言行を服膺せしめんとせる、弟子等に至るまで、啻に此等を誤解せるれみおらず、反つて之を忌憚せんとする狀況を見て、切に其れ胸間に喚起せる、孤立寂寞の感想是れあり、今や彼れが櫛風沐雨の勤勞と、悲哀慘澹たる苦心との結果は、悉く現はれて目前に在り。而して敵は日々其力を倍せんとす。此の感想の始めて明らかに現はれたるい、思ふに彼れが湖岸の地を去つて、エルサレムに向ふの初日、其の弟子を顧み「此世と汝等は我れを誰れとなすや」との問を發し玉へる時に於て存するが如し。ペテロは例の烈火の如き熱心を以て、直ちに彼れに答へて曰く「世の人は汝を以てエリヤ若くは、エレミヤの如き預言者おりとすれども、我等は信じて知る爾は活ける神の子基督おるを」と。

實に基督が明らかに其の弟子に告げて、自らは決して彼等が預想するが如き方法によりて、世に勝を制するものにおらず。反つて彼れは、將に其れ敵れ捕ふる所となり、自ら謙りて彼等れ殺害する所とおり、果てんと敢へたるい、正に是れ此時にありしなり。是に至りて、彼れが尤も親愛せる高弟等も、其れ敢れ眞意と其れ天國れ奥義お關し、如何お悟る所れ僅少おりしかを証するに足るれ事跡、直ちに其れ面前に現れたり。最も剛膽おる眞正れ勇者おあらずんば、かゝる危急れ時に際し、敢て口外するとを得ざるべき、自己れ謙退と死亡とに關する此れ預言は、直ちに彼れの高弟等をして、數日前湖岸れ市邑お紛擾せる群衆と、同一おる迷霧れ中に彷徨せしめたり。彼等が心は忠實にして而かも單純おり。此れ忠實單純れ心れ上に、一度びは彼れペテロが証明せるが如く、彼等が住食を共おしつゝおる此人れ外に、人類れ救世主たるべきもれ、決してあるべきおあらざるおりとれ大眞理が、電光れ如くに閃きしおり。雖然彼れが此れ人類を救濟するに當りてや、果して如何おる方法を用ゆるおるか、又其れ眞正れ目的は何處にあるかれ問題に對してい、曾てキリストれ身圍に迫り、休徴を求めて喧囂

せる、彼れ人民等と同一に、五里霧中、實に其れ一端だも窺ひ知ることを得ざりしあり。彼れ自からが撰びたる此の人々も、「其の言ふ所を解せざりき、是れ彼等の悟り得ざるが爲めに彼等よりかくされたるなり」。噫、實に彼等は此れ教を聽きたる后ち、直ちに誰れか天國に於て、最も大なるものたらんと、爭論を起せることは悲しさよ。此を以て主は今再び彼れに教へ最初より說き起し、彼等の間に一人の小兒を立たしめつゝ、彼れが所謂天國に入り得るものは、彼等が自ら思惟せる如きあらず。實に此れ孩兒の如き心術を有せざるべからざるを告げ玉へり。

主が變形(トランスヒギュレイション)の話說は、恰かも此時に當れり。其后直ちに、彼れは再び自己の死と謙遜とに關して、預言する所ありしが、蓋し是れ變形の時共にありて、其れ榮光を目擊せる三人の愛弟等をして、再び新になる妄想を抱かしめんことを恐るればなり。當に此時はみあらず、彼れの異力と智能とを發現を見て、十二の使徒等の心中に、無益の希望を起さしむるを恐れあるときは、常に其れ死の有樣を繰り返しも、其れ心を冷却せり。彼れペテロは大謹責を受けたるも、亦此れ時に際せるを見る、彼れが屈指の高弟等に於てすら、此れ眞理を知得せるとは、如何に遲々たりしかを察するに足れり。

此れ時に當つても、主宰教師等は敵陰に隱謀の結果として、基督の事業は其れ親戚鄉黨を初めとし、人民一般の間に於て、大なる不信用と不人望とを惹起せり。汝何時まで吾等を疑はするか、かゝる事に關して正當の判斷を下し得る人々の前に、汝が稱號を証明せんが爲め、來らんとする節期にエルサレムに上り行けよ」とは、是れ其れ親戚が搆廬(かりはすまる)の節期に近ける時、彼れに對して發せる穩便なる要求なりき。彼れは無益に其れ身を煩はせんことを欲せざりしを以て、特更に群衆と共に公然エルサレムに上り行かず、反つて節期の半頃に至り、忽然行きて宮殿の中に現はれたり。此處に再び彼れの公然自己の先行を正義なりと主張せる事は、其れ既敎中、彼れを遣はせるものの眞(まこと)なるものにして、即ち彼等の神なりと宣言せる事とによ

り斷々乎として主宰等と對敵れ位地を立てり。

是れ敢爲の大勇こそ、不思議なる人民をして、再び彼れの周圍に吸收せしめんとせしめ、「見よ彼を今憚らずして曰ふ、主宰等は、彼れを基督と知るなるらんか」とは、是れ當時人民間に行はれたる質問なりき。是なる於てか學者とパリサイの人等は、今や初めて其の吏卒の武力をよりて、彼を捕縛し終らんとを勉むるに至る。

下吏等空しく彼れを曳き來らずして歸る。而して之を遣たせる有司等は「未だ斯人の如く言し人あらず」との証言を聞き、何等の言をも發すること能はず、妄りに「汝等も亦惑されたるか」と呵責したるのみ。雖然此時未だ彼等が彼れを縛し、彼を刑すること能はざるのもせよ、彼等は飽まで難問をよりて彼れを苦しめ、訟の種を發見し、以て日々其勢力を增しつゝある、自黨の勝利を待つことを得べし。是に於てか、彼等は姦淫を爲せるとき、執へられたる婦人を彼れに連れ來り、種々なる問を發せるも、反て大に忸づる所あつて空しく退きしか、此時基督は直ちに人々に語つて、絶大なる教訓を成せり。曰く「眞理は汝等を自由を得さすべし」と。更に進んで彼等が眞理を悟り能はざる理由を告げて曰く「爾等は己が父なる惡魔より出づ、又其父は慾を行ふことを欲ひ、彼れは始より人を殺す者なり、又眞理に居らず、蓋し彼の裏に眞理なければなり」と。痛論一番大に彼等の心膽を寒からしめたり。

最后に彼れは、凡ての猶太人等が最も神聖なりと思考せる稱號の上に、自らの權威を主張して「我はアブラハムのあらざりし先より有るものなり」と斷言し玉へり。約翰傳第七第八の章中に錄されたる、撐廬の節の談話たる、想ふに是れ、世界のあらゆる勇者の記事を合したるものよりも、遙かに多く、人をして勇氣と眞正の丈夫膽に、進ましむるの力あるものなり。

撐廬の節に於ける主が行爲の風聞や、再び又たガリラヤの人民をして、一時の間、最初の熱心を再發せしめんとせり。然れども基督は此の反動を利用することを爲さず、宮淨めの節筵の時、再び又たエルサレムに上りけるが、

後ち亦た再びカペナウムニ戻り行きぬ。おりしも十二月の末つ方、若くハ十二月は初めなりしが、彼れ今や最后の上京の準備をなさんが爲めに、其の本陣に歸り行きぬ。是時に當りてや、彼のガリラヤのパリサイ人等も、幾分か自己の力の衰微せるとを悟りたりけん。急き彼の許に來り、告ぐるにヘロデの彼れを殺さんと謀りつゝあるとを以てす。然れども彼れ少しも動せず、平然として其途を歩み過ぎぬ。

群集ハ書の如くに再び彼れの身圍に蝟集せんとす。彼を是に於て人々の中より七十人を撰びて、其の道を備へしめんが爲めに、自己れ前に遣しゝが、自ちも亦尋で上京の途に就きぬ。是れ實に群衆と共にせる主が最後の巡禮旅行なりき。

然り而して今や再び彼れが旅行の初日に當り、彼れが使徒中の尤も信任すべきものすらも、未だ全く彼等の主を識得せず、又自己の天職をも明知し能ハざるを現はせり。彼等今其の主が再び人民の亘群の上に生導者として、勢力を振ふを見るに於てや、舊時の精神ハ忽ちにして、從來の力を以て現はれ來り、彼れを受けざる人民の上に、天よりの火を呼び降さんとを熱望せり。彼れが鞭責も警誡も、今や何等の益だにもなく、空しく其の耳邊を經過して、毫も其心に留まらざりき。寧ろ旅行中の出來事ハ、彼等をして天國ハ終に權威を以て、此世に到來しつゝあるなりとの妄信をして、益々强からしめたるに過ぎざりき。故に今一度び基督ハ、此の權勢的天國の建設に關する、彼等の迷夢を一掃し、忌むべきの詳細を以て、此の旅行の末エルサレムに於て、彼れが身上に起らんとする所の悲劇を反覆し、彼れハ內應せられ、異邦人の手に渡され、嘲られ、鞭たれ、唾せられて後ち、十字架に針つけられて死せんとする事を告示せり。此の敎訓の後ち、未だ數日ならざるに、實に此等の言ハ未だ彼等の耳朶に響きつゝあるの時に際し、ヤコブとヨハネハ其の想像の王國に於て、名譽の位を得んとを欲し、之を其主に求めたるを見る噫。

此の節筵に於ては、パリサイ人と學者等は、彼れが前回の上京の時よりも、頗る異色なる性情を以て彼れに接しぬ。蓋し是れ、彼れ今再び熱中せる巨群れ上に在り、自己れ階級中れ人々すら、彼れを信せんとするものあるを見たれば なり。是に於て彼等尤も熱心に彼れに求め、其の眞に離なるかを明告せんことを乞ふ。彼れは之に答べて、彼等が以て神なりとする天の父は、即ち自己を遣せる所のものなりとの敎訓を反覆し、終に此の一言を以て、斷然、自己の何物たるかを答辨せり、曰く「我れと父とは一つなり」と。

彼れ此の答辨をなすからには、夙に能く其の生せんとする結果を覺悟せり。彼れ此時は實に孤立單獨の境遇なりき。而して彼れが周圍の人々は、正しく是れ彼れを以て汚瀆の言をなすものと認めたり。已に此の汚瀆の言を發す、一死の免かれざるや知るべきのみ。然るに彼れは此時に於てすら、毫も躊躇する所なく、逡巡する所なく、靜肅と大勇の風采を以て、彼れを石殺せんとする仇敵に面せり。彼等此の威風に辟易し、恰かも彼の三ヶ月前に、姦淫せる婦人を撃殺する能はざりしが如くに、彼等敢て其一石をも彼れに投ずること能はざりき。

節筵の後、彼れは今一度びエルサレムを去り、ヨルダン河を渡りて、曾てバプテスマのヨハネが傳道と洗禮に從事せる地方に至りしが、彼のラザロが死去れ報知により、數日の間ベタニヤに赴き此處に留まれり。彼れ其友ラザロを起たしめ、再びベリヤの地に歸り、巡禮者の巨群が、此の早春の候、踰越の節に上らんとて、此地方を經過するの頃まで、此所に留まりしが、彼れも亦其の弟子と共に、此の旅行隊に加はり、宰司の市あるエリコを過ぎしに、彼れは特更に收稅吏ザカイヤの家を撰びて此に泊せり。是れ實に彼れが其の天國の建築に使用する材料の種類を、行爲を以て吾人に示せる、最後の敎訓たりしなり。

節筵の第一日に、彼れは外見上非常なる凱旋を以て、主府エルサレムに乘り込めり。市中は雷同者は巡禮者は巨群と共に、高聲「ホザンナ」を呼び歌ひ

つゝ、彼れを歓迎せり。此時再び彼れの宮殿を一掃し、免銀者は貪婪を激昂せしめて、熱心に彼の宰司等れ邪念と、主權者の恐怒猜疑とに加擔して、此の恐るべきガリラヤの革命者をば、全然地上より除去し盡し、以て災禍を未萌に防がんとするに至れり。

二日の間、彼れの宮殿其他市中の要所に於て、公然彼等を譴責し、論難し攻擊し、以て當時已に此の國民と彼れとの間に、開かれたる破裂をして、時々刻々に甚だしからしめたり。彼のヨハネ傳に錄されたる宮殿に於ける最后の狀況の、終に兩者の間に永續せる此の爭鬪の結局とはなりぬ。

吾人若し當時基督と其の國民の、盲目固陋なる主權者等との間に起れる此の永續せる爭鬪を、研究すると益々深き時の、吾人が始終基督の行爲を一貫する處の完全なる眞實と、從つて起る處の完全なる勇氣とを、認識すると益大なるべし。此の爭鬪や實に生死の分かるゝ所ろ、而かも、彼れの品性上に一毛の汚点だも殘さゞりき。宮殿に在りて最后の決戰を終へたる後ち、彼れの直ちに橄欖山腹に立ち留まり、主府エルサレムを眼下に望むや、彼れの清淨潔白なる心魂の今や悲哀の念に充ち、慷慨の情禁じ難く、万斛の血涙を湛へつゝ、號泣以て此れが救濟の爲めに禱れり。

彼れが能く堅忍不拔の精神を以て、同胞鄕黨の不信と憤怒とを忍び、改宗者の叛謀と徒弟の盲目とを容れ、而して猶太國民の暗愚なる崇拜と、苛酷なる忌憚憎惡とに耐へ、玉ひたる所以のもの、實に是れ彼れが此のエルサレムを望んで泣き、玉へる、愛腸慈眼と、熱情血涙とを有するを以てなり。實に彼れの人類の憎愛と、人類の好惡とを有し、亦此の憎愛好惡を忍び終へたるの「人の子」たりしなり。

以上吾人が記述し來りたる所の者の、必竟是れ凡て其等の苦痛を忍び得たる、彼れが驚くべき精神の力と美とを發揚し、彼れが心裡の、悲哀の跡を探究せんとを勉めたるのみ。

蓋し基督の生涯たる、千歳一時、爰に斷然世界の一大問題を判定し去れる、

もの、あり。問題とい何ぞや。曰く吾人の靈と、天父の靈とを結合し、吾人をして父を知るに足るものとおさしめたる、此の人類の元首たる「人の子」イエスキリストに對し、吾人い實に精神行爲の上に於て、果して能く同胞兄弟の關係を有するものありや否や。眞に能く枝葉の莖幹に於けるが如くに、主基督の本體に連り、全然其の心を以て心と爲し、其の行を以て行とおす。の聖域に達するを得るや否やの問題是れなり。嗚呼是れ人類運命の定まるところ、天下之よりも大なる問題あらんや。宜なるかな、基督生涯の深意、玄奥にして測るべからざるもの、一にして足らざる也。

第八章。基督の臨終。

"Thou seems't both human and divine;
The highest holiest manhood Thou!"

Tennyson.

吾人い爰に最後に考究すべき一大至重問題に達せり。是れ他なし、基督が臨終の悲哀痛哭是れなり。實に是れ基督の眞勇を拒絶するもの〻最大城郭にして、彼等冷然嘲笑して曰く、彼のゲッセマネの園に於て、明らかに其の悲哀と弱点とを現出せる、此の基督を以て、人類の主將なる代表者、完全ある人物と認定するの論據、うれ何處にかあるよし彼の聖哲殉教者等の傳記に遡ぼらざるにもせよ、死に臨んで寸毫も恐懼する所なく、悠然として基督の十字架に劣らざるの苦慘を忍び終へたるの男女、枚擧するに遑あらざるにあらずや。其の泰然として死を迎ふるの狀、遙かに基督の臨終に勝れるを見ると。

實にや、此の種の難問をおすの輩ハ、曾て余に向ひて、彼の有名なる奴隷廢止の主唱者なるジョンブラウンの死を以て、基督の死に對照して、其の優劣を批評せるものありき。是を以て余ハ今爰に此の英雄の事蹟を略叙し、以て吾人が考究の資に供せんとす。

余ハ今爰に公言するに躊躇せず。世にハ多くハ傳記ありと雖も、未だ曾て此れ高貴なる隊長ジョンブラウンに臨終に如き、勇敢にして且つ丈夫らしきハあらざるなり。殊に其死や、今より近々二十年前に起りたる、明白なる事蹟にして、吾人ハ其れ詳細を知り得るが故に、彼れの眞想を觀破するに於てハ、頗る便益を感ずるものなり。

彼れが處刑の當日まで、血痕淋漓たる衣服の儘に鉄鎖の下に起臥せしめ、而して終に處刑場に伴ひ行ける、彼の一人の處刑人すら、實に其の勇膽を驚きたり。南軍の此の一卒が、荷車の中にて彼れに對ひて「ブラウン隊長よ、汝ハ實に剛勇の人なり」と曰ふに當り、彼れハ平然答へて曰く「然り余ハ實にしかく養育せられたるなり、是れ我が母の教訓中の一たりしなり、幼時より今日に至るまで、余ハ未だ曾て肉体上の恐懼を感せしことはあらず。反つて余ハ婦人の前に、ウラ耻かしき思の爲めに困却せること多かりき」と。而して其時傍に、一の黑小兒が、其の母の腕に抱かれ居れるを見、進んで之と接吻し、泰然として處刑台に歩み上りぬ「凡ての人ハ、皆な單に自然の負債を償ハんが爲めに、土に歸せざるを得ざるものなるに、我れハ今主義の爲めに死するの榮を得るなるか」と。感謝の涙に咽びつゝ、莞爾として其の死を歡迎せり。

殉教史中此の純潔高貴なる事蹟ほど、感激すべきハあらざるにもせよ。彼れハ其の偉大なる自己の剛勇が、如何にして又如何なる處より來れるかの問題に對してハ、自ら明らかに其の出處を知りしことを記せざるべからず。彼れ將さに死せんとするの前數刻、其友に書を送つて曰く「自由と救拯との大主將たるキリストハ、余が今日まで提げたる鉄劍をハ、取り去り玉

ふを嘉みし玉へり。されど主ん其の代りに、余に授くるに他の一劍を以てせり。是れ即ち聖靈の劍なり。されば余が神に求むる處ん、主が假令如何なる處にか、余を遣んし玉ふとも、終りまで能く忠實なる一兵士たらしめ玉んん事なり」と。而して一友人彼れと別れんとするに際し、「若し君にして終まで君が本領を失ひ玉んずば、我等の喜悅ん幾何ぞや」と告ぐるに當り。彼れん答て曰ひけらく、「余ん固より必ずしかすべしと保証するを得じ。去れど余ん如何なる場合に臨みても我主イエスキリストを知らずと云ふに至るべしとん思んれず」と。余輩叙して是に至れば吾人ん知る、若し吾人にして今彼れを地下に起たしめ、其の面前に於て彼れの死を以て、基督の死に比するとあらば、彼れん必ずや周章驚愕、吾人の口を鉗んで曰んんとす。「何等の怪事ぞ、此の不當なる比較をあすとや。余れん余が國民と世界万國との同情と熱愛とに擁助せられ、而かも主イエスの惠の手に倚りすがれるに、主ん一人の同情を表するもれなく、只一人其れ酒搾を蹴み玉へるに、あらずや」と。

實に然り、キリストん毫も他人の助力を有せざりき。彼れの慧眼ん明らかに、彼れと共にゲッセマネ園に來りたる小群集中れ、最も強固なる高弟すら、旭日赫々として、其の光輝を橄欖山頂に照らさゞるに先ち、將に自らを捨て去らんとするとを洞見せり。思ふにゲッセマネの園中に、悲哀の情念禁じ難く、其の跪きて祈れる時、血しぶの如き熱汗が、其の額より滴りたりと云ふ所以のものん、其の心に自覺せる、多くの心靈上の重荷の故とん云へども、然れども又た此の絶對的なる寂寞孤獨の感想ん、大に其の悲哀を催さしめたるならん。ろん兎も角も悲哀の祈りん一度び其の口に發せるも、彼れん直ちに此の祈りを呼び戻して、「されど聖旨のまゝにあし玉へ」と、斷然其の決意を告白せり。

其時最も近き目擊者ん、悉く熟睡したりしを見る時ん、彼れが此の悲哀の祈りと、血の汗との傳說が、如何にして今日に傳んるを得しあるかん、頗る

了解し難きとありと雖ども、想ふに此事の事實あらんとい、凡ての信者が疑を容れざる所あり。實にや其時、彼れの靈魂の上に及ぼし來れる、無限悲哀の性情い、彼れの全心をして塵埃の中に覆沒し去らんとせる、一種名狀すべからざるの苦痛より、自然に生じ來れる眞正の悲慘たりしあり。

夫れ然り、然りと雖ども、假令此の苦痛と血の汗との記事を承認し、主い實に一時非常なる悲哀の中に沈めりとあすも、此事たる偶ま以て、其の時以後の嚴肅偉大ある、彼れが眞勇の光りをして、益々顯明あらしむるに過ぎざるあり。眞正の勇者を讀別するの着眼点い、危急の時期方さに至らんとするに際し、之れが爲めに隱微ある處に於てする、單獨的準備の如何によるにあらずして、寧ろ全く危期到來の其の時に於ける、其人の行爲如何にありとす。

吾人をして此の行爲の如何を一見せしめよ、イスカリオテのユダが、炬を持てる兵卒等を率ひて近づくに至り、彼れい徐ろに自ら起ち上り、其の眠り居れる弟子等を醒まし、而して自ら門に至りて其の敵に會ふ。此時宰司の長等の遣いせる武裝の群衆が、逡巡地に倒れたるを以て察するに、キリストの容貌にい一点畏懼の狀態なく、巍然として其の敵に面せるを知るに足れり。

其の夜彼れに附從してサンヒドリム會場に至り見よ。彼れい初め宰司の長等が如何に詰問するも、默して言いさりし處のことを、今い自ら明らかに說明して、毫も隱蔽する所あかりき。更に進んで宮殿の庭に至り見よ、此處に彼れい、終夜卑陋蠢愚あるユダヤの下民等の、醜汚にして、而かも卑怯不法なる、恥辱と嘲罵とを忍び玉ひ、遙かに挫折せるペテロを顧みて、其の本心を刺撃するや、彼れ大に自己の怯懦あるを羞ぢ、後悔の情やる瀨なく、終に去つて終夜慟哭、罪に泣きぬ。次にピラトの審判の座、羅馬兵卒の笞鞭の刑、ヘロデの公廳に於ける、卑陋なるガリラヤ法廷の嘲笑に遇ひ、再び又チベリヤ帝王代議官の公判廷に臨み、終には彼の無法なる、法廷の獸行を受

け玉ふに至るまで、その十字架の準備せらるゝ間だ、笞刑の傷口より、滴り來る鮮血と、其の額に戴ける荊棘の冠より、流れ下る淋漓たる熱血とが、其全身を染め上ぐるの、悲劇を演ずるに至るまで、眼を閉ぢて熟々彼れが行爲を觀察し來れ。而して此等の境遇を一貫して、彼れは寸毫も恐怖と怯懦との、行跡を現はしたるの瞬間ありしや否やを探究し見よ。

全世界の歴史中、其の尋嚴の度に於て、今や汚芥と鮮血との塊となり果てたる、此の憐むべき農民說教者と、飛ぶ鳥をも落すばかりなる、威光赫々たる羅馬の方伯との間に於ける、彼の最后の對談に比較すべきものあるを見ざるなり。方伯キリストの言を聽くや、畏敬の念禁じ難くやありけん、最后に再び彼れを公廷に連れ出し、如何にもして其の生命を救はしめんと、全力を注ひで人民と抗論せり。吾人が最初より念頭に放たざりし着眼點は、終に終まで吾人を欺かざりき。基督は其の智識と仁愛と正義とに於て、完全無缺なりしが如く、亦其の勇氣れ一性あ於ても、一點れ瑕缺あるを見ざるなり。爰に余い最后に再び反覆して曰はんと欲す。吾人此の試金石を適用すると、益精確ならば、うれ僞りなきの聽答を認識すると、又益々明晰確實なるべきなり。

世の基督敎を批評して、其の欠點を發見せりと公言するの輩、稍もすれば即ち曰く、宗敎い空理に亙るべからず、吾仏が生存する此の目擊すべく觸覺すべき世界あ於ける、明確なる現象に基ける合理的の信仰の土に、其の根蔕を打ち立てざるべからずと。

是れ蓋し至言なり。基督信徒誰れか之を拒まんや。否な是れ反つて吾人の大に主張せんと欲する所にして、恰もこれ吾人が切に擁戴せんとを欲する戰場たるなり。

試みに活眼を開きて、此の所謂吾人の棲息する所の世界を、有りの儘に探搜し見よ。世界は昔より今あ至るまで、一日として其の動作を止むることなく、常に新らしき事物を現出しつゝあるに係はらず、余は爰に再び斷言す

るに躊躇せず。他なし、東西南北、古往今來、イエスキリストの生涯と、其の事業とに比較し得るに足るの、驚くべき顯象としては、一も是あるを見ざるの一事是れなり。吾人基督の生涯を構成する所の材料を搜索し、撰擇し又之を測量し、分析すると、益大なれば、其の人類の主將とし、宙に正義仁愛溫柔靈智を於けるのみならず、又た實に眞正勇氣の一性に於ける、完全なる理想として、其の品性の發揚現出すると、又益大なるあり。是れ實に、彼れは必竟單純なる宇宙の眞理れ發現にして、萬世不易、吾人を創造せる造物れ主が、吾人人類界れ各人をして、如何なる生涯を送らしめんとし玉ふかを、血肉に於て實現し玉へるもの、略言すれば、神が人類を要し玉ふ思想の發顯たるに過ぎざればなり。

吾人は爰に基督の生涯をば、或る一方の側面より、人性の或る一德性に關係して、觀察するの勞を終へたり。然れども是れ只だ、吾人が生涯を終ゆるまで繼續するも猶ほ足らざる至大至重の問題の一小階段を終へたるのみ。未だ吾人が爲すべきとの、最小部分をも成就せざるものなり。試に看よ、古より凡ての有力なる敎育家が、畢生の目的とする所のものは、要するに皆な、善良なる國民を養成するに在りと稱す。然れども敢て問ふ、是れ果して如何すべき。余を以て是れを見れば、眞正敎育の主眼たるや、一家一鄉一國を結合する人世共通の人道、即ち「ヒューマニチー」を此世に於ける凡ての事業に於て、常に吾人の一身を離れざらしむるにあるなり。然り而して是の所謂人道なるものゝ、眞意を知らんと欲するものゝ、須らく先づ人の子なる神子イエスキリストの人物を知らずんばあらざるなり。實に彼れは、凡ての人類に共通の關係を有し、又凡ての人類が、爰なる神に對して有する所の、靈性上共通の關係を、其の一身に於て結合するの連鎖たればなり。世い神に造られたるものゝして、其の意志の行いるべき所なるに係はらず。不可思議にも、此の造物主にして又救濟者なる上帝と、之れに依つて造られたる人類との間に、悲しむべきの不調和を構成し、其の意に違背し

て、不法の爭鬪を開くに至りぬ。

此の爭鬪の秘義に關しては、如何なる聖人賢者と雖ども、固より其の眞意に達すると能はずと雖ども、然れども現今世上の最も劇烈なる爭鬪は、實に此の神の子にして人の子たるキリストの生涯の周圍に蝟集するを、認知せざるを得ざるなり。特に此の基督は人物に關する論爭たる、日一日に其の熱度を上昇し來り、萬物は皆な彼れに服從し、而して彼れが生涯と調和するの日に至るまで、人世一日として寧日なく、紛々擾々として殆んど之の底止する所を知らざらんとす、實に是を世界終局の戰場なして、人世最大の事業たるなり。

舊教新教の區別なく、凡ての教會と、あらゆる宗派とは論を俟たず、苟くも基督教國なる名稱を擔ふ、世上の主要國民が、等しく同一の責任を負ふ所のものは、實に此の一事業なり。吾人各自が老若男女の區別なく、各其の分ふ應じて爲さんが爲めに、招かれたる共同の事業は、實に此の一點に在りて存す。然り而して、吾人が苟くも希望と勇氣とを以て、此の大事業に當らんとせば、吾人は須らく基督の生涯をして、日夜吾人の念頭に活如たらしめ、恰かも沙漠に清泉を望むが如く、寂寥の地に大岩の影を認むるが如く、常に全心を彼れに注斜すると、勉めずんばあらざるなり。

大岩の影の後ろより、靜かにして細き一聲あり。其の威嚴あると、暴風地震も及ぶべき所にあらず。其の明晰にして確乎たると、晝夜の整然亂れざるが如し。此聲や、最も弱き人間にすら、滿腔の希望と活氣とを與へつゝ、常に轟き亙るなり。曰く

「汝等憂ふる勿れ、余已に世に勝てり」。

第九章。結論。理想主義。

（クリブトン大學に於ける著者の演說）

浮世の波間に浮沈する一紳士ありて、時に或は學校其他青年の集會場に臨むありとせよ。彼れが心中必ずや、曾て其の胸中に潛伏せる性情が、今や再び火焰となりて燃へ上り來り、一種異色の感想を自覺すると、恰かも是れ旭輝洋々たる山上の空氣の逍遙するが如く、一種異狀の空氣の中に、圍繞せらるゝの想ひあくんばあらざるべし。

想ふに、此の外圍の世界と隔絶して、而かも其實最も密接の關係を有する、學校其他青年の集會場を訪問する人々の中、一種の感化と熱情とを、其心中に惹き起さゞるの人はあらざるべし。

何をか一種の感化と云ふ、曰く他あし、彼れは今再び、彼の人世善惡の關門ぞ、今や其の前に開かれんとし、光明と暗黑との鍵を其手に携へつゝ、信念强く希望滿ち、其れ胸間の大理想は、未だ世上の汚穢に感染せられざる、彼の有爲多望なる青年の間に久しく振りかゝつゝあるを感ずべけれ

ば、

何をか一種の熱情と云ふ、曰く他あし、彼れは今曾て其の自らが、彼の關門を通過して、世難の險を冒して以來、其の正路を發見するとの如何に困難に、其の峻坂の如何ぞ攀ぢ難く、又其の曾て胸間に燃へ上りたる、滿腔の信仰と希望とが、幾度か其の熱度を失ないたるか、果た又た世難の勞に倦み、路傍の石に踞して、過ぎこし既往を回顧せる時、曾て胸間に赫々たりし彼の大理想すら、果して幾度か其の光輝を失ないたるか、然り而して人世行路の塵埃と、紛擾とに閉塞せられ、其の炎熱と苦悶とに攪亂せられたるの極、恰かも彼の空中の雲霧が、旭日の光輝に消散し去るが如くに、此の胸間の理想あるものも、早晩余が心中より消滅し去るの運命を有せる、一種の幻影的妄想たるに過ぎざるあきかとの大疑問は、幾度か其の心裡に轟き亙りて、再三再四、今や將さに、其の誘惑の淵に沈淪し去らんとするの危機

に臨みたるかを、歴然として心に想起し來るを以てあり。

かく一方には、自己が今ま生息しつゝある此の眼前の世界を想見し、他の一方にハ曾て自己が銃を肩にして、革嚢を背ゐして、諸共に大戰場に行軍せる、同列一隊の青年等を想起するに當つてや、腦裡に幻像は、一層劇烈に吾人の熱情を喚起し來り、一種に悲涙を催さしむるものあきにあらざるあり。

エマルソン曾て絶叫して曰く「嗚呼彼の英才と剛勇と犧牲と天上界とを發現せんとせる、彼の青年の人士ハ、今何處にかある。彼等は既に逝けるあるか。彼ハ高き理想は、已に彼等を去りたるか。嗚呼止ぬるかな、來らんとする時代は、果して之れより優れるあらんか」と。實にや、かゝる觀念と疑念とは、時々吾人ハ心を襲ひつゝある。而ゐ彼ハ、よし凡てハ場所と、凡てハ時期を一貫する能はざるにしても、其ハ幼少ハ時に於て、曾て其ハ身邊に立ちて、自己に語れる神人キリストハ足跡を追ひ求めつゝ、其ハ旅行の遼遠茫漠にして、而かも自己と、其の抱ける理想との間に、次第に廣ま り來りつゝある間隙を、涙の裡に目擊し、口惜しくも、神が自己をして達せしめんとする聖域と、實際自己と外界とが、共謀して形成しつゝある「本我」との間に、爾來益々起り來らんとする、悲しむべき距離を自覺して、無限の悲哀と慷慨とを抱きつゝ、猶ほも能く全然最初の大望を失ゐはず、勞れたりとも、飽るゝとゐく、詮方盡くれども望を失はず、一直線路に進行して、其の理想をば、應呼の邊りに保ち終りたる其人こそ、實にや幸ゐる人類あるかゐ。

余は實に曰ハんとす、其人こそ實に幸ゐるかゐ。世に此人よりも幸福ゐるハあらざるゐり。優勝劣敗てふ一言が、未曾有の歡迎を受けつゝある、此の十九世紀の物質的時代に在りて、凡ての組織は悉く皆ゐ、理想を破毀し、熱情を冷却せんが爲めの、器物ゐるかと思はしむる程ゐる、今日の時勢に於ても、かゝる人物の幸福ハ、其の眞正高貴の意味に於てハ、實に無上のものたるや、蓋し疑を容れざるゐり。

理想と實行との關係い、頗る復雜なる問題にして、未だ一定の結論なき、今日の時勢に當つて、余が敢て斷言するを憚らざる所以のもの、豈うれ奇を好むの所爲ならんや。然れども、余い斷然此の物質的時代の中央に立ちて、熱心に諸君に勸說せざるを得ざるなり。諸君若し苟も世に在りて、善事をなさんことを欲するか、須らく先づ、斷々乎として理想家の列に入れよ。其の學校に在るの時も、社界に出でたるの時も、諸君の生涯をして理想家の生涯たらしめよ。

かく云へばとて、余い毫も諸君の常に耳にする所の、實蹤躬行の敎と衝突する言を發するにあらざるなり。若し不幸にして、余の言が聊かたりとも、懶惰と怠慢とを奬勵するの器とならんか。是れ乎即ち勤勞實行の敎へと衝突するの勸告にして、余が之を言ふの目的と相去ること、天下之より甚しきなし。否な余が勸說せんとするの理想主義い、啻に能く所謂實行主義と相併行するのみならず、反つて兩者相待ちて、初めて能く全きを致す所のものたるなり。

實行主義即ち勤勞の敎こそ、實に眞正有益なる敎なりと云ふべし。假令是れ唯一最高の福音にていあらずとするも、然れ共、古來の大敎師等が、大に唱道し來りたる、健全たる敎訓たるに相違なきなり。而して一見すれば、予が今陳述する所の忠言は、偶以て此の健全なる勤勞敎と、矛盾するものあるに似たり。試に左の一句を讀め。

卑き人、彼れの志望は卑くけれど、之を認めて之をば成せり。
高き人、彼れの目的高けれど、成す事知らぬ其内に、身い先づ死ねり。
卑き人、一つ二つと重ね行き、百を積む事遠からず。
高き人、千百萬を目指せども、一を得るさへいと難し。

一見すれば、是れ即ち理想主義に對する痛切なる攻擊にして、高きよりは、寧ろ低き目的と標準とを重んじ、目に見へざる事物よりも、寧ろ目に見ゆる事物を貴ぶの主意に出でたるが如し。然れ共是れ皮相の見のみ。細心以

て之を解するに於ては、是れ畢竟不正の方法に依りて、其目的を達せんとするものゝ錯誤に對する、正當健全なる豫防的警戒にして、其所謂高と云ひ卑と云ふ所以のものは、反りて其反對の意を含有するものあるに過ぎざるなり。眞正の理想主義は、決して此句の敎ふる所と爭ふべきものにあらず。否な反りて余は斯一句をして、學校其他青年の修養場裏に、掲げしめんとを欲して止まざるべし。但し予は之れと幷べ掲ぐるに、ジョールジハルバルトの、奇拔にして深淵なる、神智の一句を以てせん事を要す、曰く

行は低く始むべし、其志天をも衝けよ。
眞の謙遜、大量はかくてこそ得るものなれ。
精神は高く保ちてよ、天を望みて弓引かば、
中らずとても木を的なる射る人よりも矢は高し。

以上二句は、兩つながら共に眞理なり、希くは青年諸子、常に之を一雙の名玉の如く、汝の懷中に納め置けよ。而して兩玉が如何ぞ相互の光りを添ゆるを見よ。

理想と實行、兩者の間果して何等の敵意やある。余は思ふに、あらゆる人世戰場の困難も、苟くも眼光銳利にして、心術の正確たる兵士には、其の理想の生涯を送るに於て、何等の障碍ともならざるものなり。如何となれば諸君試みに思へ、若し夫れ如何なる兵士たりとも、眞に能く其の戰陣の趨勢を察し、其の結局を洞觀し、最も確實に明晰に、之れを心裡に描き得るの人、而して尤も丈夫らしく、其職任を全ふせんとするの人たらんか、換言すれば彼若し眞正の理想家たらば彼れが第一に認識する所のものは、近く其の眼前に横はる處の事物をば、日夜忠實に實行するにあらずんば、到底其の必裡に確認する理想の天地に入り、勝利の榮譽に遭遇すると能はざるの一事なるべければなり。

實に然り、實行なきの理想は眞正の理想にあらざるが如く、理想なきの實行も亦眞正の實行にあらざるなり。試に彼の所謂一つ〳〵の善事を積み

行きて、終に完全なる品性を形成し、圓滿なる聖域に達せんと志せる實行主義の人々の、慘澹辛苦の生涯の末、眞實に心の底より証明する告白の言を聽聞し見よ。如何に其の音調の悲哀あるぞや。彼等い異口同音に、愁聲を發して吾人を警戒して曰く、眞正の勝利い、決してかゝる方針を以て、達し得べきものゐあらずと。

夫れ然り、人い所謂謙遜と大量。とを兼ねずして、一事の成功をも期すべからず。而して此の謙遜と大量。といジョージ、ヘルバルトの曰ふが如く、實ゐ一箇の理想なくんば、到底得べきものゐあらざるなり。余い嚮きゐ諸君ゐ告ぐるゐ、生涯理想家の軍に加擔すべきを以てせり。而して今又た之を告ぐ、諸君若し眞正の理想家たるゐあらずんば、眞正の謙遜と眞正の大量とを養ふ能はざるを。是ゐ於て諸君或は曰いん、夫れ或は然らん、只だ夫れ如何ある方法ゐ於て、吾人い理想家ゐ加擔すべき、又所謂理想家とい果して如何ある者なるか、之れが說明を聞くの後ゐあらざれば、汝が忠言の善惡を判斷すると、能はざるなり。と。是れ頗る至當なる要求たるなり。請ふ吾人をして之れが答辨をなさしめよ。否ゐ寧ろ諸君が自ら此の問題を講究するゐ便利なる二三の要點を述べしめよ。

敢て問ふ、諸君の中、誰か曾て自己の心中ゐ、己が有する凡ての惡しき習慣を脫却し、學校ゐありても、社會ゐ出でゝも、一箇の單純誠實ゐして、而かも剛勇なる丈夫の生涯を、送らんとするの決意を惹き起したる、一種の靈聲を自覺せるとのあき人ありや否や。此の聲や、或は讀書の時ゐ於て、或は禮拜の時に於て、或い友人と語る時、或い獨り默思する時ゐ於て、何れの處と何れの時とを選ばず、曾て一度びは、諸君の心耳に聞へたるとゐるべきい、蔽ふべからざるの事實ならん。實ゐ是れ、獨り基督敎信徒の經驗たるゐ限らざるなり、彼のルキュールの撰擇談より、凡ての異敎の睦話を通じ、或は萬國の歷史と文學との証明する所ゐよれば、明らかゐ是れ凡ての人類ゐ共通なる經驗たるを現いせり。マルバロー大學の講堂ゐ揭げられたる、

彼の美はしきエマルソンの一句に、慥かに此の意の發現たり、曰く

樂と塵はいと近し、神と人とに一歩のみ。

汝爲せよと義務さゝやけば、我は成し得と青年答ふ。

此の聲や、啻に英才の人を待つて、初めて自覺せらるゝものにあらず。實に幼少なる童子の心中にも轟き亙りて、大喝一聲「汝聽き且つ從へよ」と絶叫しつゝあるなり。余が所謂「理想」なるものに、必竟是れ此の心裡の微音、天外の叫聲を指すに外ならず。此の聲を聽き此の聲に從ふの人、是れ即ち余が所謂理想家たるなり。人若し眞に此聲を聽き、此聲を勸迎するに至れば、彼れに直ちに自己を脱却して、直ちに靈界に勢力と交通し、時に或に之を忌み、之を避けんと欲するとあるも、此の靈妙なる心理に聲に勢力や、外界の凡ての勢力よりも、益々其の顯明著實の度を加へ、終に、到底其の聲より自己を分離すると能はざるを覺悟するに至るあり。換言すれば、彼れに實に自己と世界の兩物をして、全然此の靈界の勢力に服從せしむるに至るまで、勸めて止まざるに至るなり。彼れ已に此の聲を聽くと云へども、自己に無力と弱點とを感識すると大なるを以て、容易に此に聲の需めに應せざるべし。然るに聲に益明らかに且つ強く、心の耳に鳴り亙るなり。かくて此の聲の命を奉戴すると、益大なれば、彼れに同時に身圍の同胞人類に對して、益々善行を爲さゞるを得ざるに至る。是に於てか、彼れに、啻に其の主義に從つて、自己の生涯を成立せしむるを以て滿足せず、自己獨りが眞善美の聖域に、直進到達するを以て足れりとせず。更に進んで身圍の同胞兄弟を助け出して、自己と共に平安幸福の大道に歩ましめんと欲するの情念をして、益盛ならしむるに至る。

以上余が人の一生涯に亙りて、始めて成就すべきの經歷をば、僅々數語の中に畧述し終りぬ。實に是れ生涯の一大問題にして、又最も嚴肅なる事件たるなり。然るに悲哉、彼の尤も熱心に此聲を聽聞し、又た尤も忠實に其の命に服從せるの人々すら、自己の內外に潛伏する、多くの勢力ありて、幾度

か彼等の進路を要塞し、其の進達を妨碍せるを告白するなり。實ゐ此の吾人の内外の勢力ハ、吾人が熱心に追蹤する理想をして、常ゐ矮少歪曲ならしめ、吾人をして其の命令ゐ服從せしめざらんが爲めゐ、日夜吾人の心中ゐゐる、怯懦怠慢不潔等の惡情ゐ哀訴して、共力以て吾人の良心に抵抗せんと勉めつゝあるなり。然りと雖ども請ふ之を記せ、萬事の成否ハ皆な其最初の第一歩ゐ在り。最初の一歩已に正し、後年の成功期して待つべきなり。然り而して此の最初の第一歩ハ、實ゐ學校の生涯ゐゐりて存す。

余ハ今爰ゐ眼光を一轉して、現今我國の形勢を一考し來り、當時の學生たる諸君ゐ取り、主として着眼すべきの特性と、抱懷すべきの理想とを、考察する所ゐらんと欲す。夫れ一國の强弱は、最も能く其の國の學校内ゐ、現出する現象を以て、識別し得るものなりとす。而して今や、少しく心ゐるの國民ハ、深く憂慮して措く能はざるの一事ゐるを見る。他なし、我國今や奢侈の風日ゐ長じ、驕逸不滿の念、殆ども底止する所を知らず。加ふるゐ剛俠の精神全く地を掃ひ士氣衰へて天地生氣なし、斯の如くゐして進まんか、消費の標準ハ日ゐ月ゐ長足の進歩をなし、今や殆んども我國の實業と社會とを、敗德の潮流中に陷溺せしめ、終ゐハ不善不正の毒理想ハ、其の根蔕を社界の心中に植へ込みて、人世の目的ハ物を得るゐゐりて、物となるゐゐらず。人の價値ハ其の所有する處の多寡によりて定められ、其の人物の如何を問ハざるに至り、果てなんとす。

已に然り、然りと雖ども、今や此の反動ハ、畧ぼ吾人の眼前に到來したるものゝ如し。かゝる物質的繁榮の、如何に空漠浮雙なるものなるか、而して國民の存亡興廢ハ、單に其の所有する所の多少ゐのみ、歸來すると能ハざることゝ、猶ほ彼の一己人が、財産の多少によりて、其の禍福を判別し能ハざるが如きものなるの理を、國民一般が悟得せざるべからざるの今日に於て、恰かもよし、反動の潮流が、我邦の上に到來したるの兆候あるハ實に無上の幸福にあらずや。然りと雖ども、永く國民の上に感染したる、奢侈の風習と

拜金主義の勢力は、一朝容易に撲滅し得べきものにあらず。而して此の惡魔の城塞を陷るに足るの、有力なる勢力や其數實に寥々たり。

此等の寥々たる勢力の中、學校の勢力はど偉大なるものなし。現時の社會を改新し、壞亂せる風紀を振興して、高貴なる理想を建設するの事業は、現時社會に活動するの人々に向つて、到底望み得るの業にあらず。若し此のとにして、到底成就するの運命あるものとせば、是れ第二の系續者たる、當時の青年を措て他に望むと能はざるなり。而して此等の青年を陶冶するの處は、即ち是れ現在の學校にあらずや。敢て問ふ、現時の學校果して如何。學校の外界の實狀を反射するの鏡たるや、今更喋々を要せざるべし。然るに是れ何等の悲哀ぞ、今や我邦の學校内にも、奢侈の弊風漸くにして行はれ來り、流行を追ひ浮華を慕ふに忙がはしく、舊衣を着け下等に乘るの節約すら、好んで爲すと能はざるに至らんとす。其の果して眞なると否とは諸君自ら省みて判定する所あるべきなりと雖、若し果して此種の事にして、眞あらば、是れ實に眞正丈夫膽の滋養汁を吸收し去り、根底より國民的生涯を腐朽せしめつゝあるなり。是れ豈に危急の大時機あらずや。只夫れ吾人は堅く信じて疑はず。腐敗の度未だしかく深からず、而して反動の潮流は、社會の他の部分より、集合團結の力つよき、學校てふ一小社會の中に於て、遙かに迅速廣大なるべきを。

世に多くの社會ありと雖ども、輿論の變更の迅速急激なること、未だ曾て學校の社會より甚しきはなし。勇氣ある學生の一團体は、以て全校の輿論を改築するに於て難しとなさず。而して此の卒業生を出すを要するの年月は、僅々數年を越えざるなり。余は今敢て之を學生諸君に問ふ。諸君敢て天下を率先して、社會の弊風を一洗するを意とするや否や。凡ての社會の活動者は、滔々として此の學校門内より、流れ出づるの當時を於て、果して能く不義に臨んで、斷乎として「余はろれを與する能はず」と言ひ放ち得るの剛勇を養成し、其理想や高潔にして、確乎不動の信仰を抱き、其の嗜好や單純

ふして、常に他人を助け得るの余力を貯へ、浮華の流行の如きに之れを全然小女の兒戯に一任し去り、專ら實力を養成し、品性を鍛煉するに汲々たる高潔男兒を以て、我邦の學校を充溢し、及ぼしてかゝる人物をして、社會の全面に普ねからしむるの日を望むと能はざるべきか。社會改築の大任は、一に今日の學生諸君の身上に在り。

然り而して、高潔なる理想を形成するの事たる啻に國家に對して莫大の裨益を與ふるのみならず、又實に自己の事業に必然的の成功を齎らすものなり。人其の職業の何たるに關せず、此の理想の勵氣にして、彼の胸底に存せずんば、到底眞正の成功を期すべからず、是れ多くの先輩が異口同音に証明して止まざる所たるなり。

今より殆んど三十年前、米國隨一の著述家たる一紳士は、當時の新英州青年に向ひ、恰かも今日余が諸君の前に訴ふる所の如き、同一の告白をなせり。其の言に曰く、

今や生涯の潮流に乘り込まんとする青年は自己の周圍に罪惡不潔を以て充ち、多くの誘惑は至る所に群集せるを見る。實業界の利己主義は殆んど窮盡に演するに至り、詐僞の領分に蹂み入らんとす。抑も實業の職たる、固より初めより人たるの道と衝突すべきものにあらず。又た一般人士の才能に、餘れる程の難事にもあらざるなり。只夫れ凡ての罪惡と弊風とは、今や殆んど極点に達し、苟も正義の生涯を、其の中に送らんとするの人士をして、意外に強大なる實力と修養とを、要するを浩歎せしむるに至れるあり。彼れの才德を具ふると大あるか、其の實業界に立ちて、自己の使命を全ふすると益難きを覺へん。彼れ眞に此の中に在りて繁榮を得んと欲するか。彼れは其の幼時と青年との赫灼たる凡ての想像を、悉く犧牲に供せざるべからず。彼れは幼時の所りを忘れ、固燥無味なる規畫の中に、其の一身を束縛し、不正不潔の空氣の中に、棲息せざるを得ざるあり。是に於てか、其の心中、苟も鍛歷すべからざる一種高貴の

聖望が、自己の中に潛伏し在るを自覺しつゝ、其の衷情の指揮する所に從ひて、能く其の命に從順に、此の生涯を過さゞるべからざるを感識する人傑に、此の實業の社界を以て、到底自己に適せざるの場處とおし、終に斷然足の塵を掃ひて、此の社會より脫し去るに至る。是れ今や余輩の日々に目擊する所にあらずや、雖然假令彼等全然商賣社會より脫却し去りたりとするも、是れ決して自己を潔よくし終へたるにあらず。如何とおれば、今や敗德の空氣に社會の全面を掩ひ、如何なる職業の區域にも浸入して、殆んど餘す所おければなり。見よ如何なる事業と雖ども各特有れ惡弊を有し、人の良心純白れ度益大おれば、自己れ其業に不適任おるを自覺すると又益大おるを見んのみ。

此等の点に着眼せる、慈善家、博愛家等に、精神的おる職業教育を以て、國家的事業の一部おりと主張するに至れり。國力如何に般富なるも、若し其れ不正不潔の分子にして、此の實業社會に跡を絕たずんば、何れの時か、眞に能く國運を伸張し、天下億兆の青年輩をして、眞正なる職業の聲價を知らしむるを得ん。

我邦の實情、今や實に此の危運に遭遇せり然りと雖も、苟も公義正道たして、猶ほ此の世界を支配するを信ずるの徒に、到底此の事の永續せんことを信ずべきにあらず。少おくとも、余が一己の觀察を以てすれば、革新の期今や近く眼前に迫れり。慥かに舊時の實業の墟跡の上に、新規の實業を建築すべきの時機に來れり。夫れ然り、然り雖ども、革新の時機に是れ、眞に尤も誘惑多き時代おして、諸君に實に此の劇烈おる誘惑の渦流中に立てるなり。

果して然らば、諸君が活動の時代たる今日に於て、諸君青年が最も着眼すべきの最大急務に、何ぞ。曰く諸君各自の一身に於て、又其の學校に於て、單純質素おして、克己自制の氣風を養成すると是れおり。單純質素、克己自制、是れ實に諸君の理想たらざるべからず。勿論彼の廉潔と云ひ、仁愛と云ひ、

眞實と云ひ、謙遜と云ひ、是等ハ皆あ千歳一貫、毫も其の必要を減ずべきの德性ハあらず。否あ寧ろ此等を含有せざるの理想ハ、理想にして理想にあらざるあり。然りと雖ども、各國、各時代ハ、必ずや其の特別ある必要と弱点とを有するを免れざるを以て、此の國此の時代ハ處するの青年等ハ、須らく能く其の必要の切迫する處を察し、時勢の要求する所を明らかにして、以て各其の弱点を補ひ、其の危急を救ハんとを勉めざるべからず。看よ彼の一見すれば、一躍成功の域ハ導かんとするが如き、輕快圓滑の處世法ハハ、如何ハ世人の滔々として、注流し去らんとするやを、「社會は其の如何ある時と所とを問ハず、必ずや其の一分子が、眞正ある人道を踐まんとするを見てハ、同盟協力以て此人を撲滅し去らんとす」とハ、頗る苛酷ある言の如しと雖ども、而かも悲しむべき眞理を含蓄するあり。今日の社界已に高潔ある理想無し、是を以て誠實ある眞正の理想家あるものハ、毫も其謙遜の美德を損するとなしハ、此の理想あき現時の社會をば、一ヶの小兒の如

くに待遇し、妄りハ此乳臭兒をして、堂々たる將校ハ擬し、號令の聲色を發せしめざらんとを勉めざるべからず。斯の如くハして、社會は初めて彼の高貴ある理想を眼中ハ有し、立脚堅固ある人士の周圍ハ附隨して、其の指揮ハ從ふハ至るあり。

天津聖女は戀々と愛を求むる者をさけど。
正しき生涯送りあゞ彼女ハ喜び尋ねきて、
榮の冠いたゞかせ、甘き杯のますべし。

成功せる實業とハ何ぞや。余ハ之れハ關して、今少しく言ふ所あらんとす。成功とハ必竟眞正ハして忠實ある勞働の結果を云ふハあらずや。實ハ是れ謙遜大量の人物と、自負大望の人物とを識別するの試金石たるなり。然りと雖ども、是ハ又た一考すべきの問題あり。他あし、社會が以て成功ありとあし、輿論ハよりて認定せられたる所のものハ、果して是れ悉く眞の成功あるか。反つて是れ醜惡、見るハ堪へざるの失敗ハてハあらざるか。是れ

豈に一考すべきの問題にあらずや。

試に看よ、當時我國の輿論は、身を赤貧に起して、遂に莫大の家產を起せる所の人々を目して、最大なる成功者となし、口を揃へて其の成功を稱賛しつゝあるなり。實に是れ近代世人が尊奉し來りたる一種異色の人士にして、其の自製的人物たるの点に於ては、飽までも羨慕すべきの價値あるものとす。只だ夫れ余輩の一考を費やすべきの点は、其の彼等が家產を起せるの方法如何にありとす。我邦急激の繁榮と國力の增進とは、固より宇内に冠たりと雖ども、其さに其の之れを致せる方法如何を講究し、國民的氣風の上に及ぼせる影響如何を考察する時は、必ずしも眞正の成功を以て目すべからざるものあつて存す。世に一代の中に、百万の富を起せるの人尠なからず。然れども一々彼等が其の此れを成せる所以の道を研究し、其の心術と行爲とが、國民の德性上に與へたる害毒と、彼等の富力が邦家を利せるの裨益とを比較し、見よ。果して如何なる感想をか生せん。

余は數年前、曾て之を人に聞けるとありき。或處に年老ひたる一商人ありけり。死に臨み其の兒等を床邊に招き、數十年間勤勞の結果たる、僅々數百磅の金を取り出し、之れを彼等に分配して曰く「我が兒よ、是れ誠に僅少なり、然れども此の中、一厘も不義の錢なし」と言終つて瞑せりと云ふ。嗚呼是れ何等の美談ぞや。彼れは慥かに成功の人たりき。其の理想徒らに財貨を得んとするにあらず、清く其の手を保たんとするにありき。而して彼れは生涯此理想に忠實なりしなり。彼れが眞正の成功實に此の一点に在り。

予熟ら近來我邦人民の、頻りに崇拜敬慕する所の所謂人傑なるものを考察するに、余が前に述べし如く、彼等の中には一種個人的分子の、大に發達するものあるを見る。彼等が生涯を一貫して、吾人の發見する所のものは、其の幼時に抱ける一片の雄志は凡ての境遇を通過して、毫も撓折することなく、終に其の目的の地位に達し得たるの一事に過ぎず。或は知事たらんと志すものあり、或は宰相たらんと志すものあり、或は幼時の封邑が今は

他人の手中に陷りたるを慨し、必ず之れを挽回せんと志すもれあり。若くハ又自己が小使として入り込みたる、一大會社の頭取たらんと志すもれあり。彼等ハ實に其の目的を成就せり。幼時の理想に忠實なりき。然れども余ハ今敢て之を問ふ、彼等ハ果して最高の理想家を以て、自せらるゝの價値あるか。余ハ未だしと答へんと欲す。如何となれば彼等が成業の動機たる、單に自負自任の一性にして、其の理想とする所ろ、一歩も利己的領分を超脱すると能はざるもの、此れを彼の犧牲の道念と、愛他の理想とに刺撃せられ、至誠止を得ずして立つものに比較するに、其の高卑到底同日の論あらざるを見れば なり。

余ハ今爰に本論を結ばんとし、回顧すれば余輩が講究に着手せる此の問題ハ、依然として眼前に屹立し、余が是迄の言論ハ、實ハ漸やく其の端緒に就けるに過ぎざるの感あらしむ。莫遮、諸君の中或ハ、余に向ひて、下の如き詰問を發せんと欲するものなきを保せず。曰く

汝が理想論ハ必竟是れ嶄新の議論なるか。曰く自制、曰く質素、曰く勇氣、曰く何、是れ皆余輩が已ハ幾度か耳にせる所にして、所謂基督教道德の主唱する所ハあらずや。且つ夫れ汝が口ハする、所謂心耳の微聲なるものハ、必竟是れ吾人の心に交通する、キリストの靈の聲にあらずや。斯の如く同一なる眞理を捕へて、之れハ着せしむるハ他衣を以てするの必要、夫れ何處ハかある。況んや此の新衣を着せしめたりとて、敢て其の容貌を美ハするハあらず、人をして信頼の念を篤からしむるの便あるハあらざるやと。

眞ハ然り、余ハ實ハ其の言の眞理なるを知る。基督ハ實ハ最大理想家たりき。天ハ在す汝等の父の完全きが如く、爾等も完全くすべし」とハ、是れ基督が吾人の前ハ打ち立てたる理想ハして、而かも永久不變、完全無欠の大理想ハあらずや。吾人人類の靈魂と交通するキリストの靈こそ、實ハ各自の心に覺知する天職其物ハあらずや。是れ實ハ然り、只だ夫れ余輩が爰ハ此

説をなすの目的ハ、暫らくの間、假りゐ全く宗教上の問題を離れ去り、吾人各自が經驗上の事實の上ゐ立ちて、此の深玄なる問題を考究し見んとを欲したるゐ在るのみ。

假りゐ今ま聖經の全部と世界の基督教國とが、明日俄然として此地より跡を絶ちたりと假定するも、同一なる事實ハ、必ずや舊の如く、諸君と余と人類一般との上に起りつゝあるべし。吾人ハ尙ほ、吾人各自の心裡ゐ於て、本我外なる或る一物が、胸底ゐ潛伏し在り、常ゐ本我の靈と交通し、且つ之を招きて、人として有する二個の權能を、發達せしめんと、常ゐ叫聲を發しつゝあるを、感識せざるを得ざるべし。二個の權能とハ何ぞや、曰く一ハ吾人各自の身体と、行爲と、思想との上に有する主權ゐして、他ハ即ち吾人が目に見へざる所の靈体と、日夜不可測なる交通をゐすにより、漸次ゐ吾人の心靈中ゐ發達する所の外界に對する權力是れなり。

斯の如く宗教の存亡如何ゐ關らず、人心中ゐ起る此の事實ハ、常ゐ存在すものなるを以て、余ハ今特更に宗教的の用語ゐよらず、又基督教の教旨を離れて、眞正の理想家たらんものハ、常ゐ此の靈界の事物と密接なる交通を保ち、以て現界の事物の上ゐ、最上の權力を有するもの、又有せざるべからざるものなるを論辨せるなり。

思ふゐ此方法や、時々之を使用するの價値ゐるものなり。蓋し當時の輿論たる、多くハ皆ゐ理想主義ゐ反對の傾向を有するものゐして、吾人ハ先づ將さゐ、此の城塞を打破せざるべからざれバなり。諸君の中、或ハ之れを感知せざるの人もゐらん、然りと雖ども、人學窓を出でゝ社會の潮流ゐ乘り込むと、益々深からば、自己が棲息する此の世界ハ、目ゐ見、耳に聞き、手ゐ觸れ、口ゐ味へ得るゐゐらざる、凡ての靈界の事物をバ、陳腐せる妄信として打毀し去るを以て、最大の成功と心得居るものゐるが如きを、感識すると又益切なるべし。此の新説の敎ゆる所を聽くゐ、曰く、人ハ最初より肉眼ゐよらずして、信仰ゐよりて生活せんと欲したりき。故に人ハ、自己の依つて

以て生活せんとする信仰を、自ら製造し出さゞるべからず。靈性上の生涯と、智識上の生涯とゝ、常ゐ相爭鬪し、勝利ゝ常ゐ智識の一方ゐ歸しつゝあるなり。一敗又一敗、遂ゐゝ曾て天下を風靡せる大軍も、今ゝ全く據る所なきの悲境ゐ陷らんとす。靈性上の生活とゝ、今や到底正氣の人の送り得ざる所とゝなりぬ。人ゝ見へざる世界ゐ關して、何等の智識をも有するものゐあらず。如何ゐして其上ゐ生涯の基礎を置かんや。今ゝ宜しく暗黑の迷霧を一掃し、眞理の存する所を認め、以て安全ゐ生涯の基礎を据へ得るの地、即ち吾人が智識の充分ゐ探究し得る現界の事物の上ゐ、汝が居城を築かざる可らず。今の時に及んで、猶ほ彼の吾人の生涯は、日々靈界に逍遙せざる可らず、かくてこそ吾人ゝ、初めて現界を支配するの力を得るなれと主張するの徒は、たとひ故意に人類を欺く徒にあらずとするも、到底迷信虛想の犧たるを免れず云々。是れ所謂當代の新說なり。かくて此の新宗の名僧等は妄りに辯を弄して、全世界を風靡せんとし、其の說法の聲は、高く祖會の全面に響き亙りて、凡ての文學に顯はれ、事業に發し、滔々たる天下の蒼生をして、悉く物化俗殺せしめんとゐす。是に於てか、人ゝ皆な飲めよ食へよ、而して樂め、明日汝は死ぬべければなりとの、恐るべき主義の中に、陷溺して、靈性上の事物を見ると、蛇蝎を視るが如く、必竟之れ生涯の平安を破り、徒らに波瀾を人心に引き起さしむるの毒物なりと信じ、世界ゝ恰然腐肉の一塊と化し了へんとす。

嗟吁是れ今日の世界ゐり。諸君青年は實に此中に生息するものなり。日耳曼寒村の寺院の戶にルーテルが其の信條を釘付けし以來、世界が未だ目擊し得ざりし危機一髮なる今日の變遷時代ゐ處し、巍然として激湍の中に立ち、以て狂瀾を未萌に挽回せんとするの責、ゝれ果して誰れの任か。ゝれ果して誰れの任か。

眞勇　終

明治廿七年五月十二日印刷
同　年五月十六日發行

版權所有

譯者　加藤直士
横濱市本町一丁目十一番地
發行兼印刷者　福永熊之助
横濱石川地藏阪一五二五番地
發行所　福音舍書店
横濱石川地藏阪
賣捌所　警醒社書店
東京市京橋區出雲町一番地
賣捌所　福音社
大阪西區土佐堀三丁目
印刷所　横濱製紙分社
横濱市太田町六丁目

6/35

明治廿七年五月十二日印刷
同　年五月十六日發行

版權所有

譯者　加藤直士
横濱市本町一丁目十一番地

發行兼印刷者　福永熊之助
横濱石川地藏阪一五二五番地

發行所　福音舍書店
横濱石川地藏阪

賣捌所　警醒社書店
東京市京橋區出雲町一番地

賣捌所　福音社
大阪西區土佐堀三丁目

印刷所　横濱製紙分社
横濱市太田町六丁目